

# 26

特集

## 新・価値を創る

—ソフトパワー時代のデジタルコンテンツ—

連載

キャンパスへ帰ろう「アメリカでの2年8ヶ月を終えて」—総合政策学部教授 阿川尚之

異国の風「己を鍛える場、SFC」—政策・メディア研究科修士課程1年 肖健

シリーズ対談「ものづくりの心得」—TBS「世界遺産」チーフプロデューサー 辻村國弘 × 環境情報学部3年 蓮村俊彰

【新連載】SFC front runner 「学際的ハイブリッド これがSFC的研究スタイルだ!」  
—前SFC研究所所長 村井純

【新連載】私の推薦図書『サル学の現在』寄稿—総合政策学部教授 重松淳



**特集**

- 04 新・価値を創る** ～ソフトパワー時代のデジタルコンテンツ～
- 
- 06 【対談】変わる教育 問われる「中身」**  
政策・メディア研究科教授 金子郁容 × 東山田中学校校長 本城慎之介
- 
- 10 【対談】守る財産×活かす財産**  
—日本を変えるビジネスモデルとは？ 政策・メディア研究科名誉教授 苗村憲司 × 環境情報学部助教授 中村修
- 
- 14 デジタルエンターテインメントの創り方** —稲蔭正彦研究会に迫る
- 
- 16 画面に頼らないデジタルエンターテインメント** —Surroundings·SENSE
- 
- 18 デジタルコンテンツの学び方** —有澤誠研究会に迫る
- 
- 20 知識立国におけるデジタルコンテンツの役割 寄稿**—環境情報学部教授 稲蔭正彦

**連載**

- 02 SFC front runner 第1回**  
学際的ハイブリッド これがSFC的研究スタイルだ!  
前SFC研究所所長 村井純
- 
- 22 When I was young 第16回**  
とりあえず決めて、やってみる  
政策・メディア研究科教授 小檜山賢二
- 
- 24 Co-net 第15回**  
大山子芸術区798J  
株式会社東京画廊 北京東京藝術工程勤務 金島隆弘さん
- 
- 26 キャンパスへ帰ろう 第12回**  
アメリカでの2年8ヶ月を終えて  
総合政策学部教授 阿川尚之
- 
- 28 異国の風 第12回**  
己を鍛える場、SFC 中国→SFC  
政策・メディア研究科修士課程1年 肖健
- 
- 30 シリーズ対談 第6回**  
ものづくりの心得  
TBS「世界遺産」チーフプロデューサー 辻村國弘 × 環境情報学部3年 蓮村俊彰
- 
- 34 私の推薦図書 第1回**  
『サル学の現在』  
寄稿—総合政策学部教授 重松淳
- 
- 36 SFCのこれからを考える 第4回**  
「かけがえのない時間を」  
寄稿—政策・メディア研究科助教授 大前学
- 
- 38 編集後記**
- 
- 39 付録 make your campus no.16**  
o(オミクロン)館 研究棟

持ち前の実験精神で常に新たな分野を切り開く慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス。ここ、SFCで行なわれる研究は非常に高く評価されている。日本の最先端&世界トップレベルの研究を評する「21世紀COEプログラム」(注)にSFCのプログラムが採択されたことは記憶に新しい。

「SFC研究所は、研究の場としてのSFCに他ならないんだ！」と村井前所長は力説する。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部で展開される分野横断的な研究を総括する役割を果たしている。つまり、SFC研究所の最大の特徴は、学際的、すなわちハイブリッドであることなのだ。国内に留まらず、世界にも通用する最先端研究の勢いは今も衰えない。

具体的には、先端的研究ミッションを持つ12の研究グループの「ラボラトリ(ラボ)」、SFC研究所と複数の外部機関によって実施される「SFC研究コンソーシアム」、外部の諸機関と一対一の契約に基づいて実施する「受託研究・共同研究」という枠組みを設けて学際的な研究を行なっている。ここでの研究成果を社会へ還元するために、毎年六本木ヒルズでデモンストレーションやシンポジウムなどを通して研究を紹介する「Open Research Forum」、新たな「知」の再編成と創造を目指す「SFCフォーラム」(<http://www.sfc.keio.ac.jp/sfc-forum/>)、次代を担うにふさわしい新事業を生み出す取り組みを進める「ベンチャード・インキュベーション支援」などの活動もしている。

このような、産業や国と大学の関わり方もSFC特有だと村井前所長は言う。「大学は研究を行なって論文を書き、学会に提出し、特許を取る。一方、産業は論文を読んで検討し、商品を作つて売る。そしてその商品を使つた人から批評してもらい、改良した商品をマーケットに出品。これまでにはそうしたファイードバックが産業までしか届かなかつた。しかし、SFCでは商品が世の中に流通するまで関わり、研究者にまでファイードバックされるようになるスタイルをとつてている。産業と学問が一緒になつて研究し、よりよい研究をめざそうとしている」。

ところが、研究評価については苦労すると言う。既存の学問に沿つた研究であれば、歴史の積み重ねによって形成された基準で研究を評価することができるのだが、SFCの研究は学際的であるが故に「これが優れた研究だ」という根拠になる「ものさし」が存在しない。そのため、研究の成果をキャンパスの外に明示し世

# SFC front runner

Vol.0：学際的ハイブリッド　これがSFC的研究スタイルだ！

今号から始まる新連載「SFC front runner」では、「慶應義塾大学SFC研究所」に焦点をしづり、21世紀をリードするSFCの最先端研究とその実態を塾内外に伝えていく。第1回の今回は、SFCの研究スタイルとはいかなるものか、村井純前SFC研究所所長のインタビューとともに明らかにする。

界中に評価を求めていかなければならないのだ。そして、研究成果を社会に浸透させるためにはさらに努力が必要になる。「たとえば、昔は買い物するのに現金が必要だったけれど、今はクレジットカードがメインになり、ネットワークを使って買い物ができる。このような技術を社会に浸透させるには、これまでのルールを変えなければならない。これに加えて、高いプレゼンテーション能力や編集能力などを使いこなせなければ、世の中を説得することはできない。こうした過程も含めて、ハイブリッドな研究を行なうことがSFCの宿命なんだ。世の中を口説くためには、かなり突っ込んだことをやらなきゃいけない」。

ところで、他のキャンパスでは成し得ない研究がなぜSFCでは可能なのだろうか。その理由のひとつは学部生が深く研究に関わっているということだ。産官学連携で学生が参加しているといつても院生がほとんどである場合が多い。しかしSFCでは学部生もキーパーソンだ。「高校を卒業して間もない、無鉄砲で寝なぐても大丈夫、怖いものなんて何もないようなやつらと一緒に研究ができる。これが僕ら研究者にとってものすごいエネルギーになつていて。これに押されて僕ら研究者も、普通のキャンパスにいる研究者とは全然違う力を出せるようになる。そして一枚岩となつた僕らがもつているのは根性!『根性』という言葉の持つ泥臭いイメージはスマートなSFCの研究スタイルとは合わない気がするんだけど、要は諦めないくつこと。この要素がSFCのハイブリッドで学際的な研究の支えになつていてるんだ」。

#### (注)

「世界的研究教育拠点の形成のための重点的支援—21世紀COEプログラム」  
2002(平成14)年度から文部科学省が、大学に国際競争力のある世界最高水準の研究拠点をつくり、研究水準の向上と世界をリードする人材を育成する目的で実施している。SFCでは2002(平成14年度)に「次世代メディア・知的社会基盤」が、2003(平成15)年度には「日本・アジアにおける総合政策学先導拠点ヒューマンセキュリティの基盤的研究を通じて」が採択された。また2002(平成14)年度には、理工学研究科・医学研究科・先端生命科学研究中心が複数専攻の組み合わせにより申請をした「システム生物学による生命機能の理解と制御」が採択され、政策・メディア研究科、先端生命科学研究所の教員も参画している。

# 新・価値を創る

## —ソフトパワー時代のデジタルコンテンツ—

昨今、デジタルコンテンツという言葉をよく耳にするようになった。デジタルコンテンツは「見えないモノ」の代表的な領域である。見えないモノに価値を付与し、コンテンツの魅力で人を惹きつける「ソフトパワー」の時代が到来したのである。

デジタルコンテンツは、どのような可能性や問題を孕んでいるのか。また、デジタル分野の最先端を走っていることを自負しているSFCは、どんなデジタルコンテンツを創造しているのか。本号ではソフトパワー時代の主役となるであろう、デジタルコンテンツについて特集する。

06

対談

## 変わる教育 問われる「中身」

政策・メディア研究科教授 金子郁容

× 東山田中学校校長 本城慎之介

10

対談

## 守る財産 × 活かす財産 —日本を変えるビジネスモデルとは?

政策・メディア研究科名誉教授 苗村憲司

×

環境情報学部助教授 中村修

14

## デジタルエンター<sup>テ</sup>インメントの創り方

—稻藤正彦研究会に迫る「デジタルエンター<sup>テ</sup>インメント」の創り方

16

## 画面に頼らないデジタルエンター<sup>テ</sup>インメント —Surroundings・SENSE

18

## デジタルコンテンツの学び方 —有澤誠研究会に迫る

20

寄稿

## 知識立国におけるデジタルコンテンツの役割

環境情報学部教授 稲藤正彦

# 変わるもの 「中身」

学校はデジタルを活かせる、  
伝統的かつ未来的組織

本城 僕が東山田中学校に着任して間もない2005年4月の授業参観日は、参加率が74%に達し、学校に対する保護者の関心の高さを実感しました。もちろん新設校であるというのも参加率を押し上げた大きな要因かもしれません。それにしても痛感するのは、保護者のなかにある「新しいことへの期待」と「今までどおりにしてほしい」という

2つの相反する複雑な気持ちです。これらに対しては、「変えるべきところはどんどん変えて、これまでにあった良いところは引き継いでいきます」というシンプルな説明をしています。

金子 私立小学校、たとえば僕がいた慶應義塾幼稚舎では遠くから通う児童が多く、校長と保護者が直接会う機会が少ないんですね。そこで、保護者とのコミュニケーションを電子メールが有用でした。小さな問題でも気軽に伝えることができるから、たくさんのお問い合わせが届きましたね。お褒めの言葉はあまり多くなかったですが(笑)。

小中学校の教育現場に、デジタル機器やデジタルコンテンツが見受けられるようになつた。しかし、それらは本当に学校に必要なのだろうか？必要だとすれば、どのように必要なのだろうか？このテーマに、教育現場とデジタルの両方をよく知る2人の教育者が挑んでいる。

慶應義塾幼稚舎舎長を務めていた金子郁容氏（政策・メディア研究科教授）と、2005年4月に全国最年少で公立学校の校長に就任した本城慎之介氏（1996年度政策・メディア研究科修士課程修了）が、「コンテンツとは何か」「デジタル技術とは何か」「教育とは何か」を問い合わせ、さらに、「伝える」とは何か」を問い合わせなおす。

本城 僕の場合、保護者が学校に直接いらっしゃることもありますが、メールを使う人もいます。僕のblogを見つけて、メールアドレスを知る人がいるんでしきうね。「この間、道で会いましたよね」という他愛のない話もあり、メールの内容はさまざまです。

金子 基本的には、問題が小さいうちに、校長と担当の先生が問題を共有していくれば、より速く対処できるしね。保護者も安心できる。その点でも、メールはちゃんと使えば大変有効なチャネルです。

本城 コミュニケーションの流れって、些細なことで変わってくる。僕は、メールも電話もFAXも、コミュニケーションツールはとにかく全部使っていいべきだと思うんですよ。学校のホームページの更新頻度をあげたり、学校がメールマガジンを発行してもいいわけです。学校から情報を発信していくことで、「見られている」という意識を学校側がもつようになることも大きな変化です。

スが入れられていることもあるんですね。担任の先生はプレッシャーを感じるでしょうね。ただ、校長にきたクレームのメールのすべてに校長が一人で対応してしまうと、ほかの先生たちのモチベーションが上がらない。「これで担任に任せています」という返事には困ります。それでも、保護者は納得してくれるようですね。そのような「情報のさばき方」が重要です。

金子 特に公立学校では、自分たちは文部科学省をトップとする巨大なヒューラルキーの一部に過ぎない、という意識がまだ根強い。しかし、自ら情報報を発信していくことで、意識の持ち方も変わる可能性があるということですね。

本城 僕の場合、たとえば保護者からメールがきたら、それをプリントアウトして、関係する教職員に見せていました。僕がどのように回答したかを伝えたり、あるいは教職員とともに、どのように回答すべきかを考えたりするんです。



本城 それは便利ですね。僕も校長になつて実感するのは、学校という場所のオペレーションの仕組みが未完成だということです。これをもつと明確に、簡

金子 僕は幼稚舎の会長になつたとき、教員間の情報共有や議論をするのに、なるべくメールを使ってもらうように提案しました。僕が着任する前に、教員全員がノートPCを持ち、構内LANがあるなどの環境は整っていた。ただ、メールは一部の教員が個人間でしか使つていなかつた。たとえば課外活動の引率とか、学校のいろいろな細かいメールについては、基本ポリシーを作り、公開する。特別なケースがあつたらその是非をメーリングリストで議論する。教員会議で議論が必要な提案については、あらかじめ提案と論点をメーリングリストに出してもらつ。こうすることで忙しい教員の時間が有効に使えるようになるんです。ただ、このようなことを実現するには、全員がメールを使えることが条件になる。幼稚舎にはひとりだけ、「信条」としてメールは使わないといふ人がいました。そこで、FAXでメールの送受信が行なえるシステムを導入して、その人はファックスで議論に参加できるようになりました。

とで忙しい教員の時間が有効に使えるようになります。

金子 学校は人間的関係が重要な場所ですから、すべての問題をメールで解決できるなんですね。

金子 学校は人間的関係が重要な場所ですから、すべての問題をメールで解決できるなんですね。でも、メールで済むことはメールで済ませ、浮いた時間を対面コミュニケーションに充てるということの重要性はみんな感じてくれたと思います。特に、学校のルールは、会社などのそれより単純です。基本ルールを作り、公開し、それに沿つたものは各自の判断で行動してもらって事後報告のみでいいことにし、ルールに合うかどうか不明確なものは事前にメーリングリストで協議することで、情報共有が進む。そして使っているうちに、みんな勝手がわかつてきて、以前より大分やりやすくなつたと先生たちにも感じてもらえたと思う。結果的に、学校全体の意思決定とは関係のないことについてもスピ

本城 学校のコンテンツって、人ですべて、これまでは当事者以外には知られなかったけど、情報共有することでその後の対応の参考になるとかね。

本城 学校のコンテンツって、人ですべて、これがメーリングリストなどをコミュニケーションの手段として使うと。これがメーリングリストなどをコモンマニケーションの手段として使って、それを授業に活かしていくこと。これがやる気を持つこと。自分自身が学習をして、それを授業に活かしていくことによって、もしかすると、授業や生徒とのコミュニケーションをより良くすることに自然と繋がっていくことによつて、もしかすると、



潔にしなきゃいけない。テクノロジーは、コンセンサスを得るに至るまでの時間を短縮するのに非常に有効な手段です。僕はよく教育委員会に言うんです。コンピュータールームに生徒用のパソコンを40台置くのもいい。けれども、その40台をまず職員室に配置すべきだと、子どもが使うよりも先に教職員が使って、意思決定の仕組みを変えていくべきなんです。情報教育の議論はその次です。

金子 金子 僕は幼稚舎の会長になつたとき、教員間の情報共有や議論をするのに、なるべくメールを使ってもらうように提案しました。僕が着任する前に、教員全員がノートPCを持ち、構内LANがあるなどの環境は整っていた。ただ、メールは一部の教員が個人間でしか使つていなかつた。たとえば課外活動の引率とか、学校のいろいろな細かいメールについては、基本ポリシーを作り、公開する。特別なケースがあつたらその是非をメーリングリストで議論する。教員会議で議論が必要な提案については、あらかじめ提案と論点をメーリングリストに出してもらつ。こうすることで忙しい教員の時間が有効に使えるようになります。

金子 学校は人間的関係が重要な場所ですから、すべての問題をメールで解決できるなんですね。

金子 学校は人間的関係が重要な場所ですから、すべての問題をメールで解決できるなんですね。でも、メールで済むことはメールで済ませ、浮いた時間を対面コミュニケーションに充てるということの重要性はみんな感じてくれたと思います。特に、学校のルールは、会社などのそれより単純です。基本ルールを作り、公開し、それに沿つたものは各自の判断で行動してもらって事後報告のみでいいことにし、ルールに合うかどうか不明確なものは事前にメーリングリストで協議することで、情報共有が進む。そして使っているうちに、みんな勝手がわかつてきて、以前より大分やりやすくなつたと先生たちにも感じてもらえたと思う。結果的に、学校全体の意思決定とは関係のないことについてもスピ

金子 特に公立学校では、自分たちは文部科学省をトップとする巨大なヒューラルキーの一部に過ぎない、という意識がまだ根強い。しかし、自ら情報報を発信していくことで、意識の持ち方も変わる可能性があるということですね。

金子  
学校は対面コミュニケーションがとても大切な場だけれど、そうだからこそ、処理できるものは素早くすることが大事だと思う。その意味で、学校は非常に伝統的だけど、未来的でもある。注意しなきゃいけないのは、ひとつやり方で縛らずに、必要なところはオープンしていく、というヒューマンマネジメントが必要だということ。そのような姿勢があれば、デジタル技術は大きな役目を持つようになると思います。

コンテクスト（文脈）のない  
「デジタルコンテンツ」は  
使い物にならない

いなポータルサイトで検索して出てきたことをそのまま書くなんていう「調べ学習」は、かえってやらないほうがいい。

本城 ほかにも、いわゆる教材として販売されている「デジタルコンテンツ」が増えていましたが、近来の「見渡覚故

本城 最近は小中学生に、インターネットを使って「調べ学習」をさせることがありますよね。あれには僕は大反対なんです。本来の調べ学習ってそういうことじゃないと思います。キーワードを検索エンジンに入れて、出てきたものを書き写して。じゃあ、それが本人の頭に定着しているかって言うと、ほとんど定着していない。だって、それは調べたことにはなりませんから。なぜその情報を選んだのかを生徒に聞くと、「検索で上の方に出でていたから」って答えると思います。でもそれは、そのウェブサイトのオーナーが検索エンジンに広告料金を払ったから検索結果のトップに出ている、ということもありうるわけですよ。やっぱり調べ学習の本質は、「検索エンジン」にはありませんよね。

金子 子どもが、ただインターネットでホームページを探すというタイプの

んでいくことの方が大事。

金子 今ある「デジタル教材」のほとんどは、教科書に載っていることと同じようなことがただ画面に出るだけ、といふ類のものでしよう。公式サイトで無料コンテンツを提供しているところなども、何をどう使うといいか分からぬものがある。それよりは、ほとんどの教員は、日常的にプリントなどを制作する場合はPCを使っているだろうから、そのような教材をどんな場面でどんな意図で、どんなやり方で使うかということを情報交換するほうがずっと効果的でしょう。つまり、コンテクス

本城 そうやつてメソッドを広げて一般化するには、インターネットが活躍すると思います。それから、視聴覚教材を見ている生徒が分からぬことがあるた瞬間に、先生が的確に答えられるこども大事ですよね。その場で答えられないなくても、問い合わせ先が分かればいい。「ここに問い合わせてこらん」って。

金子 コンテンツよりコンテンツストリーミングサービスのことを、別の言い方をすれば、「コントンツ」よりも先に、「メソッド」や「方法」ということだよね。でも、日本では教育方法と言つても、「あそこの学校に名人がいる」というような個人的なものでとどまつていて、一般化されたものがない。だから、せっかくのいい授業も、限られた狭い範囲だけで使われている。メソッドを広げる方法が必要です。そのためには、デジタル化も有効だと思います。子どもは、30分かけた下の手な説明をされるよりも、説得力のある5分間の映像を見せさせられたほうが理解できることがあるでしょう。



本城 慎之介（ほんじょう・しんのすけ）  
横浜市立東山田中学校校長

1997年3月、政策・メディア研究科修士課程修了。修士課程2年生のときに、楽天株式会社を立ち上げ、取締役副社長を務める。2002年、小中高校一貫教育の学校設立をめざして株式会社音別を設立し、代表取締役に就任。2004年冬、応募者68人の中から現職に抜擢される。現在は、2005年4月開校コミュニティ・スクール(東山田中学校)で全国最年少の校長として奮闘中。

ト（文脈抜きでは）ではデジタル教材はあまり使い物にならないということです。事実を教え込むことではなく、状況や理由や思いなどのコンテキストを教えることこそが教育ですから。

金子 極端に言えば、先生は「正解」を知らないてもいい。誰に聞けばいいのかを知つていれば。インターネット的に言えば、すべての情報が先生の頭のなかにある必要はなく、よいリンクが張られていればいい。教育の現場には、熱意と思想とメソッドが必要。それがあるって、その先にいろいろなコンテンツがあるということだと思います。

本城 日本には検定教科書があり、ベ  
ースとなるコンテンツはどの学校でも  
同じです。だから、結果として出てくる  
子どもの学力や意欲の差は、それを  
教える側、教える環境によるものなん  
ですよね。このことにもっと多くの人  
が気づく必要があります。

デジタルコンテンツとのつきあい方は、学校でしか教えられない

言えば、手で書く作文ももちろん大事ですけれど、パソコンのキーボードを使つた編集作業も大事だと思います。両者は質が全く違うのですから。ただ同時に、最低限のルールは教えていいかないといけないですよね。

金子 子供のウェブページなどで、どれだけ一般に公開するかについては、どう慎重にならなきやいないと思います。小学校中学年ごろになると、自分でウェブサイトを作ったり、仲良しの子と

メーリングリストを作つて使つたり、自分でどんどんやつっています。保護者も知らないところでやつっています。保護者少くない。すべてを保護者と学校が把握している必要はないけれど、かなり気をつけていかないといけない。幼稚舎では私がいたころから、インターネットは積極的に教えるけど、それと同時に、ウェブページをつくるときには住所は出さない、写真は載せない、掲示板利用は避けるなど、かなりしっかりとルールを教えているはずです。インターネットの向こう側には良い人もいるけど悪い人もいるということをなるべく早いうちに知らせた方がいい。だから、インターネットを使うなかで指導、あるいはアドバイスをしていくのが有効でしょうね。

「いかにたくさん集めるか」よりも  
「どういう考え方で何を伝えるのか」  
を求められています。

メーリングリストを作つて使つたり、自分でどんどんやつっています。保護者も知らないところでやつていることもあります。幼稚園では私がいたころから、インターネットは積極的に教えるけど、それと一緒に、ウェブページをつくるときに住所は出さない、写真は載せない、掲示板利用は避けるなど、かなりしっかりとルールを教えているはずです。インターネットの向こう側には良い人もいるけど悪い人もいるということを、なるべく早いうちに知らせた方がいい。だから、インターネットを使うなかで指導、あるいはアドバイスをしていくのが有効でしょうね。

本城 中学生には、メールのトラブルが非常に多いんですよ。今や、デジタルの世界との距離のとり方は、学校でしか教えられなくなつてきています。どこまでが学校の教える範囲なのかと、う議論は当然

ありますが、家庭では教えにく

金子 郁容（かねこ・いくよう）

政策・メディア研究科教授兼  
総合政策学部教授

2004年度に法制化された「コミュニティ・スクール」の提唱者。1999年4月から2002年9月まで慶應義塾幼稚舎舎長を務める。また、本城氏が政策・メディア研究科に在籍していた当時、彼の修士課程における研究のアドバイザーだった。著書に、『コミュニケーション』(岩波書店)、『コミュニケーション・スクール構想』(岩波書店)、『学校評価』(ちくま新書)ほか多数。

金子 オーブンな議論をするという習慣をつけることで、学校にある硬直性が改善されるというメリットもあると思う。これから成長してゆく子どもの学習の場である学校は、それ自体が開かれていて、いろいろな意見が飛び交い、受け入れられる場である必要がありりますよね。

本城 オペレーションの効率を上げることで、生徒の成績向上に貢献する。また、授業づくりや生徒とのコミュニケーションを通じて、生徒たちの個々の学習状況を把握し、適切な指導を行っている。

るか」ということよりも、多くの局面で、「どういう考え方で何を伝えるのか」ということがより一層重要になってくる。だから、メソッドを確立してみんなに広め、それと並行して情報共有の方法とルールをしつかりさせなくちゃいけない。



## 対談 苗村憲司+中村修

# 守る財産×活かす財産



苗村 憲司（なえむら・けんじ）

政策・メディア研究科名誉教授。専門は情報通信と知的財産権。関連著書に、『現代社会と著作権法——デジタルネットワーク社会の知的財産権』(慶應義塾大学出版会、2005年、共著)。

コンテンツビジネスを考える上で欠かせないキーワード、それが知的財産権だ。著作者の権利保護が当然のことだとすれば、現状でベストだと言えるだろうか。知的財産はどうすれば守れるのか、そしてそれはいかに活かされべきなのか。苗村憲司政策・メディア研究科名誉教授と中村修環境情報学部助教授の熱論に耳を傾けよう。



中村 修（なかむら・おさむ）

環境情報学部助教授兼政策・メディア政策科委員。専門は、計算機械学とインターネット。自身の授業を開講する上でのSOI(<http://www.soi.wide.ad.jp/>)を活用している。

### P2Pは、悪くない

中村 2003年11月27日に例のWinnyというP2P(注1)ファイル

2004年の5月に、今度はP2Pソフトウェアの開発者が逮捕されました。

後者のほうが明らかにインパクトが大きくなり、考えさせられました。P2Pのソフトウェア 자체は、インターネットでの情報や知識を共有する上で重要な

ものなんです。その多くの使われ方が非合法、つまり「今の」法律に適合しない使われ方をしてことで、開発者が捕まってしまった。僕は憤りを感じますね。P2Pというソフトウェアが悪いわけではない。明らかに利用者の問題であり、2003年に初めて逮捕者が出了途端トラブルが3割減ったという事実は、利用者の側に後ろめたさがあつたことの証拠ですよね。

一方、アップルのiTunesのMusic Store(注2)というシステムが欧米で始まり、すでにかなり大きなビジネスになっています。「ネットで音楽をダウンロードしたいけれど、適正な価格を簡単に支払うシステムがあれば払うよ」ということの表れではないでしょうか? ただ、現在の日本ではインターネットの技術と法律が整備されていないながらも、みんなP2Pを不法利用しているというのが現状だと思います。

でも違法ではない。他人の著作物を誰でもダウンロードできる状態におく行為が違法なのであって、法律は単純明快なんですよ。

今回の話について言えば、たとえば音楽のファイルをダウンロードできるような状態にした人は、自分の行為が違法だと認めている。しかし、そのことを可能にしたソフトウェア開発者は、違法だと認めていない。しかし逮捕された。これは著作権の問題というよりも、刑法の解釈の問題です。「こうすれば他人の著作物をみんなに送信できますよ」と言つたかどうか、そしてみんなに「やれやれ」と唆したかどうか、という点が争点になるので、実は知的財産権法の問題ではないんです。

もちろん、P2Pに関しては、まだまだ議論の余地あります。アメリカのようだとしていた量が多いから違法だとするのがよいのか、日本のようにアップロードすることが量とは無関係に違法(注3)だとしたほうがよいのか、あるいは第三の道を選ぶのがよいのか。でも、国会では誰も対案を出しませんね。さらに、刑法も著作権法もインターネットに関する法律も、各國でバラバラです。これは大問題で、早急に国際的な法律を整備すべきです。外国企業との契約などで不利になる可能性が高いですから、その意味でも国内での議論が必要ですね。

苗村 いや、日本の著作権法は、形としては整備されているほうですよ。もっぱら自分自身が楽しむためだけに使っているのが現状だと思いま

中村 苗村さんのおっしゃった「国内でもっと議論をすることには大賛成なのですが、既存の社会システムにとらわれすぎない議論であつてほしいですね。日本のJASRACをはじめとした著作権の代行業務団体では、利権者を守ろうとしてすこし議論が硬直している

んじやないかな。その証拠に、歐米では自由に利用できるiTunesが、日本ではできないでしょ。新しい世界へ移るということへの怖さがあるんじゃないかなと思います。でも、そこで保身に走っちゃうと、かえってよくない。

技術的な視点で言えば、本当はマイクロペイメントみたいなものが、インターネット上の基本的なシステムとして存在するべきだと思いますけどね。みんなが「いい!」と思ったら、ワンクリックで10円払えるような仕組みがあるとすれば、世の中もう少し変わることでしょう。そういうスケールの話になつてきているんですよね、現実が。

### 「誰に」「いくら」払うのか?

苗村 マイクロペイメント、つまり少額決済ですね。それは必要だと思うんですが、問題はどの程度セキュリティをかけるかです。

まず、完全な性善説的アプローチをとつて、たとえば簡単なパスワードセキュリティのみで一回のコンテンツツダウンロードに100円払うというモデルがあります。これはユーモアフレンドリーですが、権利側から見ると怖いわけですね。この程度だと、簡単にセキュリティが破られてしまう。これを成功させようとすれば、おそらく法律的にかなり強固なガードが必要でしょ。あるいは、もう少しセキュリティを強固にして、10数円くらいのコストはかかる。それを破ろうとする相当のことをやらなきゃいけないから、普通のユーザーはお金を払つてちゃんと利用する。ただ、こういうシステムづくりはかえつて難しいんです。

そして、セキュリティのために100円以上使つて強固なガードをするというのは今実際にやつていてことで、比較的簡単にできるんだけども、コストがかかりすぎてビジネスとしてうまくいかない。

中村 本当は、インフラのシステムでそれをサポートしたいんです。今はMDやCD本体に税金がかかっていたりするけれど、僕はいやだな。アーティストのように、本当にその著作権をもつている人にお金を払うのは全然いやじゃないんです。仲介事業者みたいなのを食わすためにざつくり取られてるというのが気持ち悪くて、「いいプロデュースに対価を払う」というシステムがほしいんですよ。

苗村 MDやCDの値段に入っているのは税金ではなく、著作権への補償金です。それをブルーしてから著作権者に支払うことになります。もしも仲介者を通さず、利用者が直接に著作権者に払うことになると、プライバシーの問題が出てきませんか? 誰が何にいくら支払ったのかきちんと調べようとなれば、やつぱりデータとして集めざるを得ない。しかしそれは、もうすぐ管理が難しい。

中村 本当にデータとして集める必要があるかな? 僕は、財布のようにパケットにお金をつっこんでいくようなモデルを考えているんです。

苗村 もちろん原理では匿名同士といふことはあります。先ほど言つたようにセキュリティとの関係ですよね。私的録音・録画補償金制度(注4)をや

めて、代わりに一曲ことによるよう

しようというのが、おそらく今の日本では多数意見でしょ。しかし、「わざりました。ではそのためのコストと

と言つたら、みんないやがる。それよ

りは今のように、いわばNHKの受信料と同じようにざつくり取つたほうがいいという考え方もあります。この問題はちょうど「文化審議会著作権小委員会」というところで議論している最

中ののですが、ものすごく難しいです。中村さんのおっしゃる通り、非常に低いコストでマイクロペイメントが実現されて、「一曲10円なんだけれど消費税のつもりで1円余計に払つてください。1円で一曲聴けます」というようなシステムがほしいんですよ。

中村 うーん、今すぐというのは難しいなあ。

### アニメと漫画の国、日本?

苗村 2002年に日本政府が知的財産立国(注5)という目標を掲げましたね。これまで日本経済は、製造業に依つて急成長してきました。でも、今後これ以上の伸びは期待できそうにありませんよね。この部分を何が支えるのか。それが知的財産なんですね。知的財産立国の柱のひとつになるのが、センターインメント産業です。では、コンテンツツダウンロードに支えているのか? 実はGDPの2%なんですよ。約10兆円といつたところで、残念ながら10年前とほとんど変わらない。一方でアメリカでは順

▼注1 P2P  
ファイル共有ソフトウェアインターネットにつながつた不特定多数のコンピュータの間でファイルを共有するソフト。

### ▼注2 iTunes@Music Store

米国アップルコンピュータ社が音楽会社の協力を得て運営する音楽配信サービス。音楽データを一曲単位で購入し、それを携帯機器(iPod)やPCに取り込むことができる。

### ▼注3 アップロードすることが量とは無関係に違法

日本では「送信可能化権」(著作権法23条、96条の2、99条の2、100条の4)が認められている。たとえばホームページに他人の著作物を無断でアップロードして、自動的に公衆に送信できる状態に置く(自動公衆送信可能にする)と、違法となる。

### ▼注4 私的録音・録画補償金制度

個人的に楽しむための私的な利用であつても、MDやオーディオ用CD-Rなど政令で定められたデジタル方式の機器・媒体を利用した録音・録画については、著作権者への補償金の支払いを義務づける著作権法上の規定。上記機器・媒体の価格にはこの補償金が含まれている。

### ▼注5 知的財産立国

2002年2月の施政方針演説で小泉純一郎首相が「知的財産戦略会議を設置することを宣言。同年7月、同会議による「知的財産戦略大綱」のなかで「知的財産立国をめざすことが初めて表明された。さらに同年11月には「知的財産基本法」が成立。同法に基づき、内閣に「知的財産戦略本部」が設置された。

調に伸びていて、今すでに6%を越えている。ヨーロッパでは、大体3~4%くらいといったところです。日本の2%は、冷静に考えて少なすぎる。

中村 僕も、特に漫画やアニメというコンテンツに関して、日本はかなり高

度だと思います。最近、世界のいろいろな所へ行くと必ず『アニメディア』を探すんですよ。『アニメディア』という雑誌は学習研究社の発行する月刊誌で、最新のアニメ・ゲーム・声優の情報などを掲載しているのですが、それが世界中で翻訳されていて、各国で出版されているんです。日本のアニメは世界に通用するのに、ビジネスとして成り立っているのかというと、うん、下手ですね。

ここはSFCに期待するところで、著作者へのフィードバックがしっかりとできる新しいビジネスモデルを構築すれば、世界の帝王になれるような気がする(笑)。どうやつたら利益が上がりお金を回収できるのか、コンテンツの良さが世の中に伝わっていくのか、といったところをちゃんと考えていく必要があるんだと思います。

苗村 ビジネスマodelのほうが重要で、極端に言えば著作権法は今までいいこともありますね。問題はそれを使ってビジネスが上手いくか。そうしたときに、P2Pにはプラスの要素もあるし、マイナスの要素もある。諸刃の剣ですね。

たとえば漫画でいうと、手塚治虫は高額所得者のリストに載るようなものすごい売れっ子だったわけです。でも今それにあたる人がいない。それは漫画家のレベルが下がったわけではなく、

法律のせいでもなく、おそらくビジネスモデルのせいなんじゃないでしょう。出版社が下手なことをやっているのかどうかはわからないけれど、それよりもっと収入を上げる方法を考えなくてはいけない。もちろん日本の漫画を翻訳して外国に売り込むというのもいいだろうし、アニメーションにするのもいいだろうし、たくさん考え方はあるんですよ。そのためにも、著作権を戦略的に活用していくべきではないでしょうか。

中村 そのときに重要なのが、スケールを把握するということですね。今までのコンテンツは物理的なものだったので、実はスケールが限定されていたとえばCDを100枚つくるのにいくらかかる、これを世の中に流通させるのにいくらかかる、そこからコストが見えてきて基本的なビジネスモデルがつくられていましたよね。でもインターネット上でやり取りをするとなると、もうすべてが桁違いの世界なんですね。僕が心配しているのは、あまりにもスケールが大きなこの世界を把握できている人がいるのかということ。たとえば、先ほどの「いいと思った音楽を1円でダウンロードできるシステム」があったとして、世界中の人都がある曲をダウンロードしたらいくら集まりますか? まあ、そこまではいかなく

ても、100人に一人がダウンロードしただけでも大変になってしまふ。そして一方で、ある曲は5人しかダウンロードしなかつたと。そしたら5円ですよ。このスケールの違いをして厳しすぎるとも思つんですね。当たりしないと生きられない。

苗村 そこでバランスをとるのが、先ほどの仲介団体がお金を集め、最低限の生活を保障するという考え方があります。特に、若手を育成するためにも、それはスケールが限定されていたかもしれませんね。悪平等になってしまふ可能性もありますが、たとえばなんらかの仲介団体がお金を集め、最低限の生活を保障するという考え方があります。特に、若手を育成するためにも、それはスケールが限定されていた。

苗村 わかりやすい話をするとき、今のところ無料だから、消費者はそこまで選んで買える。そのためのコスト返品可能で、本屋はいわば本を預かっている状態です。本は立ち読みだけなら今のところ無料だから、消費者はそこまで選んで買える。そのためのコストが、非常に大きいんですね。そういうことを合わせて、無駄であることは必要になつてくるかもしれません。



## 移り変わるビジネスモデル

もちろん基本的には歩合制ですね。仲介団体が半分もお金を取っていたらけしからんと思うけれど、仮にそれが10%くらいに留まるなら消費者もいやではないと思うんですよ。

# 今、新しいビジネスモデルを構築すれば、世界の帝王になれる気がする(笑)。

中村

中村 社会を考えるだけでなく、みんなのハッピネスを考える。無駄によって食つて居る人がいっぱいいるってのは事実だし、よくわかるんですけど、まずはもう少し素直に考えようよつて思いますけどね。

ビジネスモデルの一例として、『アイ、ロボット』という映画に斬新なものを感じましたね。あの映画は、公開する前にもう儲かっていたという話を聞いたことがあります。封切しなくても収支が合う。どういうことがどうと、スポンサーに車のメーカーであるアウディがついていたらしいんです。

観た人は気づいたと思いますが、映画のなかにアウディの車がいっぱい登場していたんですね。つまり、あの映画はアウディの宣伝広告のようなものだと言えるかもしれません。確証のある話ではないんですけど、もしそうであれば、P2Pを使って無料でいいからみんなに観てもらおうほうがCM効果があるはずです。エンドユーザー以外のところからお金を回収できちゃうっていうビジネスモデルもあるわけです。

苗村 日本でつくるのが映画であれ何であれ、広告でビジネスをしようとする世界の消費者を相手にする必要があるでしょうね。外国の製品、たとえばコカ・コーラのコマーシャルでビジネスをやるのであれば、それはありうるんですよ。特にマンガやアニメの類には、大いにその可能性がある。今のところ日本人が強そうなのは、やっぱりコンテンツ・ビジネスなんですよ。正確に言うと、発明とコンテンツ・ビジネスです。発明は強いですよ。これは間違いなくこれから製造業に代わるぐらいの力をつけるはずです。いずれも知識的財産ですから、やはり知的財産立国というのは現実的で将来性のある政策だと思っています。

中村 そうですね、だからこそ早急に

## SFCがすでに中心的な役割を果たしているかというと、まだ疑わしい。

苗村

新しいビジネスモデルをつくる必要がある。

苗村 P2Pについては、利用者の立場からだけではなくて、アーティストの立場からも「これだったらビジネスとして収入が増える」というシステムを考えてみるのもいいんじゃないでしょうか。そういうシステムが実現すれば一番いいと思うんですが、まだ誰もうまいアイデアを思いついでないんですね。

いずれにせよ、今までのものはどんどん変わるし、先ほどレコード会社とか映画会社の例もありましたが、間違いくらい彼らはこれから10年ぐらの間に大きく方向転換せざるを得ないでしょう。しかも国内だけでなく、世界中が運動しながら変わる。たとえば、10数億人の人口を持つ中国が本気で新しいビジネスモデルを打ち出してきた

中村 やっぱりリスクヘッジをする仕組みがないと上手くいかないでしょう。そういうことも含めて、今SFCではう可能性を考えると、日本は一刻も早く新しいビジネスモデルを形成して、

コンテンツ・ビジネスで成功を収めなければならぬのかもしれません。SFCの学生はこのことをきちんと認識したうえで、コンテンツ・ビジネスの新たな道を切り開いていってほしいですね。また大学側は、そういう学生をサポートするための仕組みを築いていく必



しよう、そしてビジネスの世界での会計や経営についてコンサルティングをしてあげよう、こういう方針で少しずつ作っています。SFCとしてコンテンツ・ビジネスで勝ちにいこうというとの表れじゃないかと思いますけどね。

苗村

私はちょうど今SFCを定年退職したばかりなので、非常に冷静な目で見られるのですが、SFCは間違いなくこの中心的な役割を果たそうとしているんですよ。でもすでに果たしているかというと、まだ疑わしい。既成概念にとらわれず、P2Pも含めたさまざまな技術をビジネスに活用すれば、もっともっと大きなビジネスモデルを作れるはずです。今後の展開に期待したいですね。

### ▼注6 インキュベーション施設

慶應義塾大学、神奈川県、藤沢市、独立行政法人中小企業基盤整備機構が連携して設立する「慶應義塾大学SFC連携型起業家育成施設」のこと(施設名称「慶應藤沢イノベーションビレッジ」)。今年度中に、看護医療学部校舎付近に完成予定。公募で選ばれた学生起業家、教員、藤沢市内の企業などが入居して、藤沢市と神奈川県の産業に貢献する新しいビジネスの創出をめざす。



写真(左)：研究会から立ち上った会社のひとつ「うつ」が製作したMYSQ(ミスク)。



写真(右)：MYSQのなかに入ると、自分のショート・プロモーションムービーを作成できる。



徳久悟（とくひさ・さとる）

2002年慶應義塾大学法学部政治学科卒業。政策・メディア研究科後期博士課程在籍中。UTUTU Co.,Ltd.取締役 Creative Director。「身体性」「実空間」「経験」をキーワードに、インタラクティブコンテンツのデザインを行なう。主な作品にatMOS(Siggraph2003 Emerging Technologies採択)、SUIRIN(Siggraph2005 Emerging Technologies採択)など。

## デジタルエンターテインメント の創り方 —稻蔭正彦研究会に迫る

稻蔭研究会には、デジタルコンテンツのセミプロとも言える学生たちが、ひしめいている。この研究会ではどのような活動が行なわれているのか？ 主要メンバーである政策・メディア研究科後期博士課程在学中の徳久悟さんに話を聞いた。

トップダウン方式にならない研究会  
——活動内容を教えてください。

研究会の授業外でも常に何らかのプロジェクトに参加していなければなりません。

——自己満足を越える活動  
——活動を通して、常に意識していることは何ですか？

まず、研究会に入った学生は10ほどあるプロジェクトのいずれかに参加します。もちろん、新しくプロジェクトを立ち上げたいという意欲があれば、その内容を研究会運営組織に提出し、認められれば自由に進めることができます。研究成果が上がるまでの過程で、稻蔭教授からのアドバイスやプロジェクト発表の場が頻繁に与えられます。だから、学生をバックアップする環境は整っていますし、トップダウン方式の研究会ではないので、自由度はかなり高いと思います。

研究会の授業は、教授が国内外で見てきたことを学生に伝える場です。「この国ではこんなに面白いことをやっていたよ」というふうに。そこから学生は刺激を受け、自分たちの研究活動に還元していく。しかし、やはりプロジェクトごとの研究活動が主体なので、

暗黙のルールに、「ただ表現するだけでは駄目だ」ということがあります。自分たちの表現したコンテンツが社会的評価を受け、商品として社会へ出ていくことが最終的な目標なので、常に稲蔭教授の外部に発表することによって、スポンサーがついたり、国から資金援助を受けたりする場合もあります。もちろん、そうした資金援助のないプロジェクトもありますが、結果を出せば、スポンサーになってくれる企業とのミーティングを稻蔭教授が設定してくれることもあります。

また、資金援助だけでなく、学生ベンチャーも奨励しています。稻蔭教授自身が会社を経営しているので、事業を立ち上げ、会社を運営していくノウハウを教えてくれます。現在までに、稻蔭研究会の学生が立ち上げた会社が4つあります。僕自身、そのうちのひとつである「うつつ」という会社に携わっています。うつつ(現)という言葉には「現実・現場・現在」という意味が込められていて、real world based communicationが会社の理念です。もっと現実世界で楽しいことをしたい、パソコンの画面ばかりに向かっていたら女の子にモテないぞ、という気持ちもありましたね(笑)。現在、原宿にあるKDDIの展示施設でMYSQ(ミスク)と

KEIO SFC REVIEW No.26 | 14

## 「意識されない」という理想

——稻蔭研究会にこれから入る学生に期待することはありますか？

まず、デザインの定義をきつちり持つている人です。それから、自分の考えを他人に説明できる人。自分の頭の中にあるコンテンツが、どう新しくて、どう社会性があって、人々がそれを手

にしたときにどう感じるのか、ということを語れる人がほしいです。

また、稻蔭研究会を志望していない学生でも、何かを表現してコンテンツを作つていきたいと思うなら、まず動くことが何より重要だと思います。動きながら考える。そして自分が「これだ！」と思ったものにはとことん時間をかけることです。時間をかければ自然とスキルはついてきますから、とにかくまず動いてみることです。

また、違う分野に触れてみると大切です。僕自身は政治思想に興味があるのですが、思想や哲学の本をよく読みます。

——今後デジタルコンテンツはどうに展開されていくと思いますか？

利用者がデジタルコンテンツを意識していないということが望ましい状態なのではないでしょうか。僕らは日常生活を豊かにするためのツールを作っているんです。だから、デジタルコンテンツはテレビのように、日常のなかで自然なコンテンツになるべきだと思います。



Flexible Chochin

fumicoプロジェクトコンテンツ

電子ペーパーをデジタル素材として日用品に登用した。「薄い、軽い、曲がる」という電子ペーパーの特徴をランプのシェードに活かした作品。

(C)2004 "Flexible Chochin" bumico Project, Inakage Lab. Keio University

いうコンテンツを展示しています。これは、自分のショート・プロモーションムービーを手軽に作成し、しかも携帯電話で視聴・交換できるというものです。また、愛・地球博(2005年日本国際博覧会)ではTrace & Smileとい

う企画を出展しています。これは運ばれてきた料理につけられたコードから、料理の食材を生産した人がどんな人なのか、どんな想いで作ったのかといった生産者の情報を消費者に伝えるシステムです。

——研究会の学生は卒業後、どのような道に進むのでしょうか？

ベンチャーや立ち上げる学生もいますが、大半は就職しますね。ただ映像が得意な人は映像系の製作会社に、



MYSOのムービーサンプル。

発想力の優れた人は広告代理店に、ネットワークに強い人は通信会社に就職するというように、それぞれ研究会で培った自分の技術や能力を活かせる業界に就職する学生がほとんどです。でも、教授は大学院で研究を続けてほしいと言っています。僕は博士課程に在籍しているからわかるんですが、学部生時代は時間をかけて研究活動に没頭することがなかなかできません。だから専門性を高めるために大学院に進むのは意味のあることだと思うんです。

コンセプトは、「自分らしい魅力的な仕草を発見する」。体の動きに合わせた映像効果が加わったり、仕上がったムービーを携帯電話でダウンロードしたりすることができる。

す。それが確実に自分の研究活動に還元されている。社会を変えるコンテンツの根底には思想がなければならないと思ってるので、自分の専門分野以外の情報を得ることで自分の思想を培养してほしいです。

# 画面に頼らない デジタルエンターテインメント

デジタルコンテンツをつくる稲藤正彦研究会では、どのようなプロジェクト活動が行なわれているのだろうか。ここでは、オフィスでのコミュニケーションを支援するためのコンテンツを考案・製作するSurroundingsと、「香り」のエンターテインメントを研究するSENSEの2つのプロジェクトのメンバーにインタビューした。

デジタルはちょっとした「魔法」

「10年後、自分たちがこういうオフィスで働きたいと思っているんです」と語るSurroundingsの代表の植木淳朗さん（政策・メディア研究科博士課程2年）。デジタル技術を駆使し、エンターテインメントという切り口で人と人との交流をより魅力的にするコンテンツを考案する。2003年には目の前にいる人のコミュニケーションをおもしろくしたいという思いから、自分の声が振動となって相手に伝わるカフエ用の椅子などを製作した。そして、



## Surroundings ▶▶

Surroundingsのメンバーによると、これまでのオフィスでのコミュニケーションは「コミュニケーションをより魅力的なものにする」という観点で、オフィスでのコミュニケーションを支援するためのコンテンツを考案・製作する。2003年には目の前にいる人のコミュニケーションをおもしろくしたいという思いから、自分の声が振動となって相手に伝わるカフエ用の椅子などを製作した。そして、



写真(上)：社員証「ChainID」のモデル。状況に応じて表示が変化する。

写真(下)：椅子「Parabol-a」と照明「Breathing」を合わせて「Cafe Tools」と呼ぶ。「Parabol-a」はお互いの声を振動にして伝え合い、「Breathing」は、会話に合わせて動く。

2004年からはオフィスでのコミュニケーションをより魅力的なものにす

る照明オブジェ、壁、社員証などを製作中である。このよう今までにないデジタルコンテンツを考案するには、デジタル技術が必要なのだろうか。

「発想力も必要ですが、むしろ何をもとに発想しているかのほうが重要です。発想のものがユニークだと、その先はもつとユニークなものになる。さらに、誰もが思いつくところで発想を止めてしまうのではなく、みんなが考える以上のことで、自分のできる範囲外のことまで追求する姿勢が大事だと思っています」と植木さんは言う。多種多様なアイデアが生まれるのは、発想の仕方やきっかけが人によって異なるからだ。Surroundingsのメンバーのなかには、生活のなかで不便に感じていることをきっかけにする人もいれば、ちよつとしたいたずら感覚で作品を思つくる人もいる。メンバーの視点が多様だからこそ、このプロジェクトは次々と新しいアイデアを生み出すことができるのかもしれない。

### [ Surroundings ]

植木淳朗 政策・メディア研究科博士課程2年  
岩田幸也 政策・メディア研究科修士課程1年  
丹羽善将 政策・メディア研究科修士課程1年  
渡邊康太郎 環境情報学部3年  
徳永翼 環境情報学部3年  
平岡悠 環境情報学部3年  
岡崎真理子 環境情報学部3年  
松平紗永子 環境情報学部3年  
小林祐樹 環境情報学部2年  
富田尚尚 環境情報学部2年  
橋本哲勇 環境情報学部2年

[コラボレーター]  
岩井将行 德田研究室助手  
樋口文人 安村研究室研究員

2004年からはオフィスでのコミュニケーションをより魅力的なものにす

ば?』と応えてくれる環境がある。思いつきを現実のものにするプロセスがすごくおもしろい』。デジタル技術は、アトログの世界での不可能を可能にするちょっとした「魔法」のようなものだ。

未来のライフスタイルを変える

しかし、Surroundingsで製作されているものが、今すぐオフィスで受け入れられるとは限らないだろう。植木さんは強調する。「デジタル技術のことばかり考えているわけではありません。日常生活をいかに楽しく過ごすか、という視点が常にあります。そうして生まれたアイデアを実現に結びつけることができれば、きっと今よりもっと楽しい生活ができると思うです」。

「そうですね。製作しているものを作っているんです。現在のマーケットを通して、僕たちは10年後の新しいライフスタイルを提案しているつもりです。学生だからこそ提案できるものを、製作しているんです。現在のマーケットに通用するものを作ろうとするならば、学生だからこそ提案できるものを、製作しているんです。現在のオフィスで働いている人がほしいと思うものを作らなくてはなりません。でも、僕たちの夢のようないいアイデアも、今のうちから企業と一緒に実現するかもしれない。将来、自分が働くオフィスにSurroundingsのアイデアが活かされていいなあ、と思っています」。

「未来のオフィスがどのように変化するのか、10年後が楽しみだ。

「ブルースト効果」という言葉を「存知だらうか。20世紀におけるフランス屈指の小説家、マルセル・ブルーストの小説『失われた時を求めて』のなかにある、マドレーヌの香りから失われた記憶を取り戻す描写に由来し、ある特定の香りに触発され、それいまつわる記憶を思い出す現象のことと言うらしい。あなたは香りに反応して、たとえばんやりとでも特定のイメージを思い浮かべないだらうか。SENSEのNozoki-Hanaは「香り」のイメージに「音」で輪郭を与える、ユーザーに特定の記憶を喚起させる作品だ。

SENSEは、香りを切り口にエンターテインメントを考えるプロジェクトである。彼らの活動は、グレープフ

ルーツの映像に特定の香りを組み合わせたCMを製作したことから始まった。しかし、すでに動画と音声で完成された映像に香りを組み合わせても、その存在感が際立たないし、映像でグレー ブフルーツを見せてしまうと、鑑賞者はそれ以外のものを香りから想像できない。そこで、メンバーは映像へのこだわりを捨て去り、香りをテーマに研究を練り直した。Tシャツを三日間連続で着用して仲間同士の体臭を嗅ぎあつたり、セザンヌの絵のリングを消して、そこにリンゴの香りをつけたり、シャボン玉にお香の煙を入れてみたりと、暗中模索を続けた。

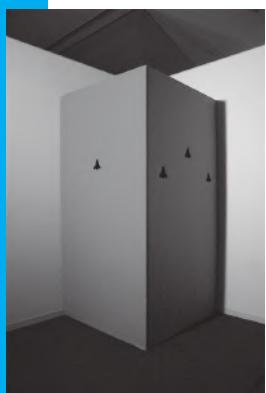
ヒントを与えてくれたのは、香道だ。香道は香りを鑑賞して楽しむ日本古来の伝統芸能で、香りを「嗅ぐ」とは言わず「聞く」と表現する。この表現が示す、

嗅覚と聴覚のつながりがヒントになつた。香りのもやもやとしたものの音が加われば「あ、あの香りだ!」と輪郭を描くことができる。メンバーは香りと音の組み合わせに着目し、その結果生まれたのが、壁の覗き穴に目ではなく鼻をあてて香りを「聞く」仕組みの「Nozoki-Hana」だ。

「Nozoki-Hana」には、鼻の形をした穴がいくつかあいており、そこに自分の鼻を入れると、特定の香りとそれにまつわる音声が流れてくる。たとえば、ある穴からはカレーの香りと共に子供たちの「いただきます!」という元気な声がする。「ある映像を見せられて『懐かしいね』と言われても、違和感があるませんか?」とSENSE代表の勝本雄一朗さん(政策・メディア研究科修士課程2年)は言う。人はそれぞれ違った思い出と懐かしさを持つているのに、一つの映像ではそれを表しようがない。しかし、香りならば曖昧だけど確かな記憶を呼び起させるのだ。Nozoki-Hanaは、映像がもたらす意識的なイメージを解放し、遠い昔の記憶をそつくりそのまま思い出させてくれるかもしれない……。



写真(上)：穴を覗くと花を嗅ぐよう に香りを聞くことができる「Nozoki-Hana」。



写真(下)：「Nozoki-Hana」の外観。写真はモノクロだが、実物には表面にピンク色の生地が張られている。存在感と優しい肌触りを両立させるために、テクスチャー選びには苦労したらしい。

## 五感で愉しむコンテンツ

ふだんから映像に親しんでいる、画面のないSENSEの作品を「アナログ」エンターテインメントかと思いがちだが、メンバーの三浦北斗さん(環境情報学部4年)は「画面がないとアナログに感じるかもしれないけれど、それがな

くなつたことでむしろやれることが広がつたし、ぬくもりを感じられるようになつた。僕らはデジタルを勘違いしているんじゃないでしょうか」と話す。デジタルエンターインメントといえばゲームやCG、という連想が一般的であるなかで、あえて映像を使わないことをSENSEのメンバーは普通だと考へている。五感に対する独自のアプローチを行なったSENSEならではの考えだろう。なるほど、ビジュアルだけがデジタルエンターインメントではないわけだ。こうした五感に対する捉え方はSENSEの作品に強い影響を与え続けている。今後に向けて、嗅覚に飽き足らず、味覚をも含めた作品を構想しているそうだ。

マルセル・ブルーストは、意識的思考では決して取り戻すことができなかつた記憶を、マドレーヌの香りによって描き出した。このようにSENSEは、視覚的な感覚だけでは決して作り出せないエンターインメントを、鼻の形をした穴の中に込められた「香り」と「音」で実現したのだ。

### [SENSE]

勝本雄一朗	政策・メディア研究科修士課程2年
金井絵里花	環境情報学部4年
キリーロバ・ナージャ	環境情報学部4年
東香緒里	環境情報学部4年
三浦北斗	環境情報学部4年
松本敬史	環境情報学部3年
佐々木礼子	環境情報学部2年

# デジタルコンテンツの学び方

## —有澤誠研究会に迫る

交通運輸情報を扱うプロジェクトと、芸術や遊びを扱うプロジェクト。一見、相反するよう見える2つのプロジェクトを同時に展開する有澤研究会とは、一体どのような研究会なのか。研究会のあり方、そしてデジタルコンテンツの未来について、有澤誠環境情報学部教授に話を聞いた。

### Transportationの探求

—研究会の活動内容を教えてください。

今、研究会は大きく二つに分けられています。一つはアートやアニメを制作するプロジェクト「ACE」、もう一つは、JR東日本寄附講座の一環として実施しているプロジェクト「JRE(左ページ参照)」です。これは清木康環境情報学部教授の研究会、及び大学院研究プロジェクトと協働で進められています。

### 問題を矮小化しない勇気

—現在研究会にいる学生、またこれから研究会に入りたい学生に求めるものは何ですか？

SFCの特徴は問題発見・解決型だと思っていますよね。しかし、解決するところばかりに目を向けてしまうと、人間はその問題を解けるように、小さく捉えてしまう傾向があります。それではつまらない。仮に一気に解くことがで

きなくても、まずはちゃんと問題の全體像を把握してから、一部でも問題を解いていけるような学生がほしいです。

また、問題発見をするためにはまず、学問の枠を超えて諸科学横断で攻めなくてはいけません。SFCは諸科学横断を理念に掲げていますから、ほとんどすべての学問分野の先生がそろっています。SFCだけで一つの小さな大學になっているんです。ぜひその良さを活かして、諸科学横断の研究をしてほしいですね。一人が複数の視点から問題を捉えていく、これこそSFCらしい研究のあり方なのだと思います。

### 「デジタルコンテンツ」もひとつの流行語

—「デジタル社会」から「デジタルコンテンツ社会」に変化していると最近よく耳にするのですが、それについてはどう考えていますか？

言葉というのは、ある程度古くなると、中身が同じでも変わらなくなるんです。だから「コンテンツ」という

言葉も、同じような意味で最初は「マルチメディア」と呼んでいました。しかし、それも言い古されてきて、なんだか時代遅れな感じになってしまった。それで今度は「コンテンツ」と呼ぶようになりました。だから「デジタル社会」でも「デジタルコンテンツ社会」でも間違いではないけれど、要是ネットワーク上にある「中身」がいかに重要視されているか、ということだと思います。

### ビジネスがすべてではない

—有澤研究会では今後どのような分野に力を入れていくのでしょうか？

単なる技術だったネットワークが表現の手段として使えるようになり、芸術や遊びといった新しいコンテンツも企画されるようになりました。これらは直接ビジネスには結びつかないかもしれません。でもそれ 자체が楽しいとか美しいということは、ものすごく大事だと思つんです。楽しいというのはエンターテインメントだし、美しいと

いうのはアートであって、金儲けのためのものではないですね。存在するだけでなんだか心安らぐ、楽しいというものを、これからはめざしていくのです。

有澤 誠（ありさわ・まこと）

環境情報学部教授兼  
政策・メディア研究科委員  
1985年に東京大学で工学博士号取得。専門は、コンピュータ科学、コンテンツ工学、交通運輸情報論など。「モデリング・シミュレーション入門」「アルゴリズム論」などの授業を担当。





## JREの概略

交通運輸情報プロジェクト (Japan Railway Environment Project、以下JRE) とは有澤研究会の一つプロジェクトで、1992年にJR東日本の寄附講座として開設された。

それまでは交通移動環境に関して、乗客の立場に立った改善策を実施するための方策が十分ではなかった。そこで有澤研究会では、交通運輸情報に関する諸問題の発見と、情報技術に基づいた解決を通して近未来のビジョンを描き、そこに至る政策提言を行なっている。

JREの具体的な活動内容としては、交通運輸関連施設の見学、JR東日本研究開発センターでの研究発表会、そして一年間の活動報告として『交通運輸情報プロジェクトレビュー』の発行が挙げられる。また、毎年JR東日本の研究員が有澤研究会に学びに来ることで、人材交流が図られている。

JREでは、大学院生や学部生の活躍が多く見られ、素晴らしい成果を発表している。ここでは、JREプロジェクトの一つである「歩行者ナビゲーションプロジェクト」を紹介する。

# ■研究活動紹介 ◀◀JREプロジェクト

## 歩行者ナビゲーションプロジェクト

市場宗丈さん(環境情報学部3年)と、下雅意浩明さん(総合政策学部2年)が手がけるこのプロジェクトのコンセプトは、「時刻表示+ナビゲーションの一体型システム」の構築である。従来は携帯電話のアプリケーションとして、時刻検索システム(「駅すばあと」・「乗り換え案内」など)やナビゲーション(EZナビウォークなど)のような、時刻表示やナビゲーションのどちらか一方を備えたシステムは存在したが、その両方を兼ね備えたものはなかった。二人はこの点に着目して、2004年10月にこのプロジェクトを立ち上げた。すでに2004年に、SFCの研究発表の場である「Open Research Forum」でアプリケーションのデモンストレーション用プログラムを発表し、好評を博した。

この歩行者ナビゲーションの仕組みは、乗車したい駅と路線を入力すると、現在の時刻から乗車可能な列車の時刻が表示され、同時に現在地から列車の発車ホームまでのナビゲーションがスタートするというものだ。ナビゲーションの仕方は、現在は文字や画像による説明が中心だが、将来的には音声も導入する予定だという。

このプロジェクトに取り組んでいる市場さんと下雅意さんは、「アイディアを出すことと、それに向かって取り組むことの重要性に気づいた」と言う。「問題は何か」ということをまず発見し、あとはそれに向かって一歩ずつ前進していくけば、必ずや問題解決の道が開けることを2人は実感しているのだ。

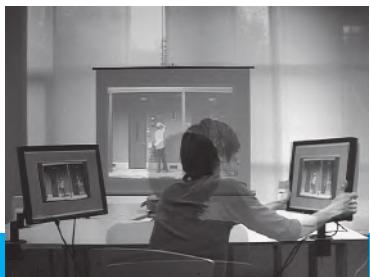


### [ JREプロジェクト ]

大谷内肇	政策・メディア研究科修士課程1年
石原浩	総合政策学部4年
青柳成明	環境情報学部4年
高橋準	総合政策学部4年
矢野道輝	環境情報学部4年
市場宗丈	環境情報学部3年
下沖功児	環境情報学部3年
森田哲也	環境情報学部3年
八巻祐次郎	環境情報学部3年
山中資久	環境情報学部3年
下雅意浩明	総合政策学部2年

# 知識立国におけるデジタルコンテンツの役割

はじめに



映像の進化を提案する研究。マルチスクリーンを活用することで、そのスクリーンを直接動かしてズームするなどの操作が可能になる。

21世紀に入った今、我が国は「知識立国」の旗の下、心を大切にする社会の実現をめざしている。20世紀の高度経済成長期に象徴される物質主義のもとでは、社会で価値があるとされたものは車や電気製品などの「触れられる」モノだった。そして、いかにそれらを効率よく大量生産するかに重きがおかれていた。デジタル技術は、この効率化を支える重要な役割を担つていた。それに対して、知識立国の考え方では「見えない」モノの価値を十分に認める社会をめざしている。ソフトパワーの時代であり、デジタルコンテンツはまさしく見えないモノの代表的な領域である。「デジタルコンテンツは、映画、アニメ、ゲーム、コミック、音楽

といった特定のエンターテインメントコンテンツ分野を指す用語として解釈されがちであるが、本来はもっと幅広い領域を網羅する用語である。医療分野でのコンテンツ、教育現場でのコンテンツなど、さまざまな分野でコンテンツは重要な役割を担つている。

デジタルコンテンツは、最先端の技術に意味を持たせる役割を持っているが、特にユビキタスコンピューティング技術を活用することで、ユビキタスなコンテンツはライフスタイル、ワークスタイル、ラーニングスタイルに溶け込んでいき身近な存在になつていくであろう。そのとき、デジタルコンテンツは人と人をつなぐ新しいコミュニケーションを形成することにも寄与できること。

現在注目されているblogは、パーソナルな立場からコンテンツを発信するためのメディアと言えるが、他の人のblogコンテンツを参照するなど、blogコンテンツ同士の連携を可能としているのが最大の特徴である。それは、blogで発信されたコンテンツを中心に行き集まってきたコミュニティが形成されるからである。オンライン上のコミュニティと実際のコミュニティを融合させることができ、「ミニユーティ型コンテンツ」の魅力である。すでに、オンラインコミュニティ上で映像や音楽コンテンツを共有したり交換したりするようなコンテンツの流通が盛んであるが、

今後はコンテンツを製作する場としてのコミュニティも増えていくであろう。

## 産業としてのデジタルコンテンツ

デジタルコンテンツは、産業として期待され始めている。日本政府は、映画、アニメ、ゲーム、コミック、音楽を日本のコンテンツ産業の主分野として位置づけ、国際競争力を持たせようとさまざまな政策を打ち出している。

特に、映画のデジタル化によって新しい市場が創出される可能性を持つデジタルシネマは、国内外で注目されている。デジタルシネマは、現在の映画館の興行収入を中心とした映画産業に加え、映画館以外の場で映画コンテンツを観賞することを可能としており、すでにインターネット上の映画視聴、携帯電話での映画予告編の視聴が実現している。今後、もっとさまざまな場所やデバイスで映画鑑賞が可能となる上、二時間という長編映画のみならず短編映画の市場が形成されていくであろう。

## 新しい感動と経験を創造するデジタルコンテンツ

SFCの政策・メディア研究科メディアデザイン・プログラムでは、21世紀におけるデジタルコンテンツとしてユビキタスコンテンツの領域を開拓する研究活動を開始した。21世紀のライフスタイルに適した新しいデジタルコンテンツは、生活に密着したコンテンツであり、状況や人によって変化していくダイナミックな機構を有し、モノや環境に溶け込んでいくと考えられる。

ユビキタスコンテンツの概念に近いコンテンツやデザインの研究活動は、徐々に国内外で活発になってきている。最も有名な研究所は、マサチューセッツ工科大学(MIT)の「メディアラボ」であり、「Things That Think」や「Tangible Media」といった新しい概念と技術を創りだしている。初代MITメディアラボ所長であったネグロボンテ教授は、80年代にアトムからビットへシフトしていくことを提唱し、90年代に

分野としても急速に成長している。特に携帯電話は単なる電話ではなく、すでにコンテンツやコミュニケーションのツールとなつており、数多くのコンテンツが携帯電話のために製作されることで、携帯電話に搭載される機能も進化し、映像など大容量のコンテンツの需要が高まっている。

しかし、デジタルコンテンツはこれらの特定分野以外にも幅広く捉えるべきものであり、今後経済活動に貢献していく分野はさらに増加することが予想される。たとえば、ネットワークを始めとするインフラに付加価値を与えるコンテンツは、IT産業の活性化を支える役割を担つていき、コンテンツ



稻蔭 正彦（いなかけ・まさひこ）

環境情報学部教授兼政策・メディア研究科委員  
メディアデザイン・プログラムチェアパーソン

専門は、コンピュータ・グラフィックス、デジタルシネマ、メディアアートなど。「エンターテインメントストラテジー」などの授業を担当。著書に『マルチメディアの冒険』(オーム社、1994年)など。主な映画作品にはExecutive Producerとして参加した「The Day I Was Born」(2002年カンヌ国際映画祭批評家週間招待作品)などがある。

技術などの知的財産を重要視しており、その研究成果から多数のベンチャービジネスが創出されている。たとえば、アンビエント・デバイシスという会社では、家庭に置くおしゃれなデーブルランプを商品化しているが、このランプはインターネットに接続でき、WEBサービスを通して天気予報や株価情報を取得し、ランプの色を自動的に変化させる機能を有している。たとえば、晴れは緑、雨は青といった意味づけをすることで、生活中でさりげなく情報を取得できるデバイスであり、おしゃれなインテリアである。

ヨーロッパでは、イタリアの大手通信会社であるテレコム・イタリアの支援により、ミラノ近郊のイブレアという小さな町に所在するInteraction Design Institute Ivreaという大学院大学が、ユビキタスコンテンツに近いコンテンツやデザインの研究と教育を行なっている。ここでは、世界中からデザインを有する学生が集まり、インタラクションを実現するさまざまな技術を習得しながら、人とコンテンツとのインターラクションから、新しい楽しさを引き出すプロトタイプを数多く試作している。特にプロダクトデザインとデジタルコンテンツの融合が進んで

おり、洗練されたモノ（プロダクト）にデジタルテクノロジーを埋め込み、そのモノとユーザーとのインタラクションを通じて感動と経験を提供しようとしている。

このように、21世紀のデジタルコンテンツは、「見えない」モノとしてのコンテンツと「見える」モノ（プロダクト）との融合をキーポイントとする。たとえば伝統工芸とコンテンツとの接点においては、日本特有の完成度の高い工芸（技）とデジタルコンテンツを融合させることで、日本文化を反映させようなコンテンツを創出していくことが可能となる。

MITメディアラボは、設立時から技術などの知的財産を重要視しており、その研究成果から多数のベンチャービジネスが創出されている。たとえば、アンビエント・デバイシスという会社では、家庭に置くおしゃれなデーブルランプを商品化しているが、このランプはインターネットに接続でき、WEBサービスを通して天気予報や株価情報を取得し、ランプの色を自動的に変化させる機能を有している。たとえば、晴れは緑、雨は青といった意味づけをすることで、生活中でさりげなく情報を取得できるデバイスであり、おしゃれなインテリアである。

ヨーロッパでは、イタリアの大手通信会社であるテレコム・イタリアの支援により、ミラノ近郊のイブレアという小さな町に所在するInteraction Design Institute Ivreaという大学院大学が、ユビキタスコンテンツに近いコンテンツやデザインの研究と教育を行なっている。ここでは、世界中からデザインを有する学生が集まり、インタラクションを実現するさまざまな技術を習得しながら、人とコンテンツとのインターラクションから、新しい楽しさを引き出すプロトタイプを数多く試作している。特にプロダクトデザインとデジタルコンテンツの融合が進んで

おり、洗練されたモノ（プロダクト）にデジタルテクノロジーを埋め込み、そのモノとユーザーとのインタラクションを通じて感動と経験を提供しようとしている。

SFC発ユビキタスコンテンツ

欧米のこのような動向を踏まえ、SFCではメディアデザインという視点からユビキタスコンテンツを研究していくにあたり、コンテンツ、テクノロジー、セオリーの三軸で研究を推進することで、これまでの表現のみを重

視したコンテンツ研究とは一線を画した研究活動を実践しており、国内外から注目を集め始めている。バウハウス運動（20世紀初頭にドイツで起きた芸術運動）が100年前に「デザイン理論」と教育を通して、世界デザインに大きな影響を与えたように、SFCの目標は21世紀の新しいメディアデザイン理論に基づくコンテンツを創出していく。つまり、SFCメディアデザイン・プログラムが考えるデジタルコンテンツは、表現、技術、理論に同等の重みを認め、クリエイター（デザイナー）はエンジニアであると同時に理論家でもあるべきであると考えている。

SFCメディアデザイン・プログラ

ムは、すでに国内外にさまざまかつ斬新なコンテンツ・デザインを提案しておる、注目されつつある。今後も21世紀のコンテンツとデザインの大きな流れを創ることに寄与していきたい。



寄木細工の伝統工芸とミックスドリアリティという先端技術を融合させたコンテンツ。デジタルな音符が実際のモノに当たると音が出る。



音符が寄木細工のモノと合成されて実際には表示されている。

# When I was young



卓球の関東選手権で優勝したとき。右側が若き日の小檜山教授。

教壇で、魅力ある講義をしているあの教員は、どんな人なのだろう。

学生が教員と接触する機会は、そうたびたびあるわけではない。

しかし、そんな教員にも若かりし頃、学生だった時代があった。

どのような学生時代をすごしたのか。当時の経験がその後の人生にどのような影響を与えたのか。

この連載では、学生時代の体験を中心に、教員たちの人生のターニングポイントを探る。

連載第16回の今回は、小檜山賢二政策・メディア研究科教授に話を聞いた。

## 蝶が縁で大学院進学

僕は慶應義塾普通部から慶應義塾大学に入りました。普通部では、夏休みに何か興味のあることをやってきて、「労作展」で発表するんですよ。僕は虫好きの友達と写真好きな親父から影響を受けて、蝶の写真を発表し、特選を取りました。中高時代は卓球に夢中で、高校時代に関東選手権で優勝したんですよ。勉強なんてしてなかつたら、当然成績は今ひとつ。大学に上がるときは、当時一番人気のなかつた電気科によくひつかつたという感じですね。周囲からは、大学でも卓球や、卓球をやれと言われましたが、工学部は武藏小金井にあり、日吉で活動する体育会に所属するのは難しかつたので、大学時代は普通に勉強しました。でも蝶の生態写真撮影に忙しくて、「よい学生」とはいえなかつたですね。

ある時、担任の先生に「うちに日本の蝶の権威がいるので一度会つてみたら」と勧められ、工学部の助手だった藤岡知夫さんに蝶の生態写真を見せました。藤岡さんは私の写真を見るなり「大学院に残れ」と命令したのです。「じゃあそします」と進学しました。大学院でレーザーの研究を始めたのですけれど、新設の研究室で装置も何もない、研究室に泊まり込むほど一生懸命に研究しましたよ。勉強は苦手だったけれど、考えることは好きだったので、自力で新たなモノを作っていくのが面白かったんですね。自分で考えて工夫して、それを実現していくというプロセスの大切さを学び

ました。大学院での研究は社会で直接に役立っているわけではないのですが、研究に対するアプローチの仕方を習得したことや一つのことを達成したという自信が、社会に出てからの支えになつたと思います。

## 虫の研究から無線の研究へ

学生時代にニューギニアへ蝶の撮影に行きました。その途中乗っていた船が、グアムに立ち寄ったので蝶の撮影をしたのです。そうしたら、MP（ミリタリーポリス）に引つつかまつてしまつて。何がなんだか分からぬまま基地に連れて行かれてしまつた。どうやら僕は立ち入り禁止区域で撮影をしていましたよ。運悪く港に原子力潜水艦が入つていて、中国のスパイと疑われたのです。パンツ一丁にされて、爪と指のすき間まで調べられたんですよ。暗号が隠されていなかつて。フィルムを没収されただけれど、ちょっと怖かっただけです。後から港以外の写真が現像され日本に送られてきたのには感心しましたね。アメリカらしいよね（笑）。

無線との出会いも、蝶採集がきっかけでした。ニューギニアで飛行機に乗つて移動していたとき雨が降つてきて、ラバウルの飛行場に戻れなくなつたので、ものすごく小さな飛行場に着陸しました。そういうところでの命綱が、無線通信であることを知りました。また、蝶の撮影をしにアメリカから復帰前の沖縄に行つたら、方言ではなく標準語が使われていました。というのは、本土から無線通信で中継した放送が流れていますからなんですね。そんなことがあって、

無線の研究をすぐやりたいなと思いました。NTTに入社し、希望通り研究所の無線部門に配属されたので、移動通信をはじめ衛星やマイクロウェーブなど、無線システムの研究は大体やりました。

## 多様性を教えてくれる虫の世界

このように、虫の研究は趣味といえば趣味なんだけれど、僕の人生を変えているところもあるんですよ。虫の種類は少なくとも一千万種以上だといわれている。そういう特別な世界だから、虫とつきあつているところの発見があるし、教えられることもあります。僕のテーマは「多様性」。なぜ多様性が大事かというと、多様性がないと何かが起きたときに全部ぶつ壊れちゃうから。でも、虫は一千万種以上いるから何か突然とんでもないことが起こつても、何種かは生き残るわけです。

昔は、勉強は全然できないけれど、自然の中に行けばどこに虫がいるとか、山にかかる雲を見て雨が降るから帰ろうとか、自然に詳しい子がいたんだよ。そういう子が尊敬されていた。初めは知識に基づいて判断しているんだろうけれど、だんだん感覚的にわかるようになるんでしょうね。何でもそうだと思いますよ。ある意味デジタルも突き詰めると、アナログ的な人間の感覚にたどり着くんじやないかと思つてます。自然も人工物も人間にたくさん情報の情報をくれて、人間はそれを目で見て肌で感じて、頭の中で概念に直してます。情報通信は発達したけれど、自然の多様な情報を的確に処理する人間の能力は下がりつつある

から、それをメディアが助けてくれる。もちろん人間はそういう能力を取り戻した方がよいのだけれど、当面は仕方がないでしょう。僕が研究しているマイクロプレゼンスで何ができるかというと、虫をデジタルカメラで撮り三次元のコンピュータモデルをつくつて、三クロの限界まで虫の実態を感じ取る手助けができるんです。

SFCの学生で心配なのは、何をするのが決める人が多いこと。「もつとやりたいことがあるはずだ」と思つて学生時代を過ごすことほど無駄なことはない。思い当たりだらう。（笑）僕の研究会では、「あなたの人生を今すぐ、決めなさい」とてわざと言います。何かを一生懸命やると、自分が変わることですよ。自分が変わつたら、そこでやりたいことを再び決めればいいんですね。若いところに目標を立てて、とにかくわーっとやつてみることが大切だと思う。ただ、どんなことでも地道に努力しなければならないことつてあるでしょ。そこから逃げないようですね。そこまでやらないと自分は変わらない。SFCは理工学部と違つて幅広く履修できる自由があるから、有効に使えばすごいことができる可能性がある。学生のうちは、ライフワークみたいなことを思いつめて考えないほうがいい。50歳くらいになればわかりますよ。目の前のやりたいことをやつていたらそれが自分のなかで統合されていくって、だんだん自分が本当にやりたかつたことはこういうことだった

のかつて。

でも、やりたいことをやるつてけつこう大変なんです。才能も技術もないとダメだし、お金がなきやできなことがあります。僕はやるといふことをなんとかやつてきたとは思うんですけどね。なぜ続いたかというと、僕は引退しないで、休むんです。面白くなくなつたら休んで、やりたいと思つたらまた始める。ある段階までいくと自分が変わつてくから、また違う目で考えられるようになる。そう繰り返すうちに、だんだん一流になつていくんですよ。

小檜山 賢二  
(こひやま・けんじ)



政策・メディア研究科教授兼環境情報学部教授  
専門は、ワイヤレスコミュニケーション。  
2004年に写真展「Micro Presence 昆虫 ミクロ・リアリズム」を開催。この個展で、北海道東川町から国内外の優れた写真家に授与される「第21回 東川賞 新人作家賞」を受賞。また、マイクロプレゼンスの思想・技法・作品を収録した『虫をめぐるデジタルな冒険』(岩波書店、2005年)を出版。

# Communication & Network Co-net

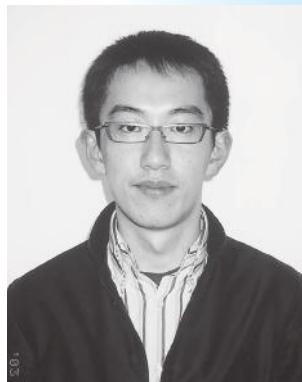
～未来をつくる卒業生たち～

かね しま たか ひろ

## 第15回 金島 隆弘さん

株式会社東京画廊 北京東京藝術工程 プロジェクトマネージャー

2000年度 総合政策学部卒業  
2002年度 政策・メディア研究科修士課程修了



## 大山子艺术区798厂

かつて「未来からの留学生」としてSFCで学んだ学生たちは、いま実際に

未来を創り始めている。彼らはSFCで何を学び、今、何をしているのだろう？

この企画では、そんな卒業生に社会での奮闘の様子を語ってもらうとともに、  
今後社会へ羽ばたこうとするSFC生へのアドバイスをいただく。

今回はSFC7期生（2000年度総合政策学部卒業）で、株式会社東京画廊の  
北京東京藝術工程に勤務する金島隆弘さんにインタビューした。

4年生のときに建築の勉強をしていた仲間と、ある企画案を書き上げました。当時は、すでにほとんどの若者が携帯電話が普及していましたので、私たちは逆に「家の中で電話をすることに付加価値をつけるデザイン」を提案しました。タイトルは、「ひっぱる、コミュニケーション」。ねじったり、ゆらしたり、そういうった動作を伝えあって、コミュニケーションを楽しみながら、相手をもつと身近に、そして繋がっているという実感を得られる現代の糸電話です。部屋の中だと体を自由に使って表現できる。コミュニケーションが3次元になるおもしろさをつめこみました。フィンランドセンター（注1）と携帯電話会社のNOKIAが主催する「デザインコンペ」にこの企画で応募したこと、金賞を受賞したんです。卒業一ヶ月前、僕は副賞としてフィンランド行きの切符を手にしました。

フィンランドのツアー中に受けたNOKIAのインターネットの面接に受けたことで、僕の人生はさらに変化します。修士課程一年の夏から半年間、タンペレという街に住み、ユーバリティの研究をしました。ものを使い勝手、ユーザエクスペリエンスなどを調べていました。帰国後も、NOKIAで知り合った方々からいろいろなアドバイスを聞きつつ、修士論文を書きました。

修士課程を修了した後は東芝に就職しました。学生時代には、国際的な現代美術展である横浜トリエンナーレのスタッフを務めたりアート系の授業のティーチング・アシスタンスをしたりして、アートにはとても興味を持

つていましたが、アートを仕事にすることになるとは微塵も思っていませんでしたね（笑）。美術館に行くことはありましたが、画廊へ足を運んだことは一度もなかったのです。

——SFC卒業後から、今までの道のりを聞かせてください。

4年生のときに建築の勉強をしていた仲間と、ある企画案を書き上げました。当時は、すでにほとんどの若者が携帯電話が普及していましたので、私たちは逆に「家の中で電話をすることに付加価値をつけるデザイン」を提案しました。タイトルは、「ひっぱる、コミュニケーション」。ねじったり、ゆらしたり、そういうった動作を伝えあって、コミュニケーションを楽しみながら、相手をもつと身近に、そして繋がっているという実感を得られる現代の糸電話です。部屋の中だと体を自由に使って表現できる。コミュニケーションが3次元になるおもしろさをつめこみました。フィンランドセンター（注1）と携帯電話会社のNOKIAが主催する「デザインコンペ」にこの企画で応募したこと、金賞を受賞したんです。卒業一ヶ月前、僕は副賞としてフィンランド行きの切符を手にしました。

フィンランドのツアー中に受けたNOKIAのインターネットの面接に受けたことで、僕の人生はさらに変化します。修士課程一年の夏から半年間、タンペレという街に住み、ユーバリティの研究をしました。ものを使い勝手、ユーザエクスペリエンスなどを調べていました。帰国後も、NOKIAで知り合った方々からいろいろなアドバイスを聞きつつ、修士論文を書きました。

修士課程を修了した後は東芝に就職しました。学生時代には、国際的な現代美術展である横浜トリエンナーレのスタッフを務めたりアート系の授業のティーチング・アシスタンスをしたりして、アートにはとても興味を持

つていましたが、アートを仕事にすることになるとは微塵も思っていませんでしたね（笑）。美術館に行くことはありましたが、画廊へ足を運んだことは一度もなかったのです。

——なぜ、東芝から東京画廊へ転職することを決めたのですか？

東芝では、ノートパソコンの商品企画を担当しました。入社した年の8月にアメリカへ出張する機会に恵まれ、現地でフレインストーミングをするうちに、創作意欲がふつふつと湧き上がってきたのです。運がよかつたのでしょうか、人手が足りないと理由で念願の新商品企画を任されることになり、製品の商品化までこぎつけました。それが全世界で発売されて、ヨーロッパ市場で四半期の売り上げの51%を稼いだんですよ。

ノートパソコンの企画という仕事を簡単に説明すると、まずは、商品企画の担当者が商品のコンセプトを立案し、それをベースにエンジニアやデザイナーと一緒に話し合います。全世界に点在する現地法人のマーケティングの担当者とも話しますね。そして、商品のスペックをどんどんつめていき、それを確定した後に量産に入れます。不器用な私も、徐々にその仕事のサイクルに慣れ、手際良く仕事ができるようになりました。そして、私自身が企画をしたノートパソコンの販売がひと段落し、一通りの区切りがついたと感じたとき、次のステップとしてもっとクリエイティブな仕事を欲するようになつたのです。そこで東芝からNOKIAへ転職することに決めました。ただポジションの関係で、実際にNOKIAで働くまで4ヶ月ほど時間ができ

たのです。その時期に私は、かつて学生時代にティーチング・アシスタントをしていた「デザイナ言語演習」という授業の担当教員であつた画家の吉田暁子さんの紹介で、特に現代美術を扱う東京画廊(注2)と出会つたのです。

2002年の夏に東京画廊の中国での活動拠点であった北京大山子芸術区へ出向いて、ついに惹かれました。この機会を逃せば、アートを仕事にする機会は二度と巡つてこないと思い、NOKIAへの就職を取りやめ、今に至ります。

### 解き放たれた街

——東京画廊ではどういった仕事をしているのですか？

アーティストとコレクターを繋ぐのが、画廊の仕事です。東京画廊のような企画画廊は、アーティストを発掘して作品の展覧会を行なつたり、世界各国のアートフェアに参展したりする」を通じて、アーティストを育てています。

東京画廊は中国の現代アートにいち早く着目しました。1989年に起きた人民解放軍による武力弾圧事件、天安門事件の後、中国人アーティストたちが一旦は世界中に散らばりましたが、やがて舞い戻ってきて北京にも「大山子芸術区798」というエリアができました。

私は現在北京へ移住し、北京東京藝術工程を拠点に中国人アーティストの発掘作業や展覧会の企画、アートスペースの運営業務などを行なっています。また、インターネットを通じて作品の紹介や販売、そしてインターネット上での展覧会の企画も始めました。

——金島さんからみて、中国にはどんな魅力があると思いますか？



中国現代美術の作家サン・シャオタオとともに。

## 変化する社会の 只中に生きる。

「大山子芸術区798」で何が起こっているのかを必死に追つているのです。表現の自由を渴望し、かつ政治の力に立ち向かつている作品にはパワーがあります。たくさんのアーティストやコレクターと話す日々は感動と驚きの連続です。彼らと交わす会話は、すぐく知的で面白みがあり、人生において素晴らしい体験をしていると思います。

——金島さんの夢を聞かせてください。

「大山子芸術区798」で何が起こっているのかを必死に追つているのです。表現の自由を渴望し、かつ政治の力に立ち向かつている作品にはパワーがあります。たくさんのアーティストやコレクターと話す日々は感動と驚きの連続です。彼らと交わす会話は、すぐく知的で面白みがあり、人生において素晴らしい体験をしていると思います。

——グローバルにビジネスを開拓していくたいと考えるSFC生に、メッセージをお願いします。

全てはプロジェクト

学生の間も、そして就職してからも、いつどんな機会に恵まれるか、そしてそれがどこでどう繋がっていくかはわかりません。ですから、いろいろなことに関心と興味を持ち、やると決めたことは「プロジェクト」だとう意識を持って頑張つてみてください。プロジェクトとして考えることの利点は、物事を客観的に見て判断し、行動できること、そして「ゴールをよりクリアに定められること」だと思っています。「だいたいこの位の期間でこういったことができるだろうな。だから今はこれをやっておこう」といった具合に考えれば、ビジョンがはっきりし、目標を定めやすい。常に自分の状況を把握して歩むよつ心がけること。そうすればおのずと充実した楽しい人生が送れるのではないかでしょうか。

インで起きたバウハウス運動のように、建築やファッショニ、デザインなどの異分野のクリエイターたちや企業などとも積極的にコラボレーションしていくんですね。そして将来は、こういった経験を活かし、教育や文化などを含む日本の美術制度にきちんと政策提言できる人間になりたいと思います。

(注1) フィンランドセンター  
研究・高等教育・文化面における日本とフィンランドの相互協力を推進する機関

(注2) 東京画廊  
1950年開廊。http://www.tokyo-gallery.com/



阿川尚之教授インタビュー  
SFC三田会からのお知らせ

## キャンパスへ帰ろう

第12回

キャンパスが懐かしくなる瞬間



# キャンパスに帰ってきた阿川尚之教授

## —アメリカでの2年8ヶ月を終えて—

阿川尚之総合政策学部教授が2年8ヶ月ぶりにアメリカからキャンパスに帰ってきた。  
アメリカで感じたこと、そして久しぶりのSFCに期待することを伺った。

### —OB・OGとのつながりで、キャンパス が懐かしくなる瞬間

2002年の9月4日に渡米し在米日本大使館の公使の一人として、広報と文化を担当していました。たとえば、記者会見やプレス対応などの仕事です。また、留学生の送り出しなどのさまざまな文化・教育交流にも携わりました。大使館では、しおりちゅう何かが起こつて、毎日忙しかつたです。

そうした多忙な日々のなかで、SFCが懐かしく感じられたのはOB・OGが遊びに来てくれたときでしたね。アメリカにはSFCから留学していた人がかなりいてね。この国でもOB・OGはやっぱり活躍してると、と思って嬉しくなりました。メールで「研究会のOB会やりました。」って教えてくれたときなんかは懐かしかつた。

SFCに戻り、このキャンパスが大きく変わつたという印象は受けません。食堂がよくなつたけど(笑)。もちろん、授業を始めたばかりだし、学生さんの気質がどういう風に変わつただとかはまだわからない。けど、SFC生はみんな元気だという印象があつて、その元気さを当然保つてくれているんでしようね? という期待はあります。

### —アメリカの大学のうらやましいところ

いくつかの大学に行つてうらやましいなど感じたのは「カレッジ制」です。カレッジとは、学生と先生が一緒に住み学んでいる、キャンパス内にある建物のこと

を指します。これはイギリスの伝統だと思うのですが、教授がカレッジのヘッドとなつて、大学院生もそこを本拠にし、学部の学生と一緒に住み学んでいる。たとえば、そこで演劇大会をしたり、家庭教師をお互いにやつたり、カレッジのながでゼミみたいのがあつたりするんだ。SFCもそういう半学半教の伝統はあるけれど、一緒に住まず、皆遠いところから通つてているでしょ? 僕は以前からSFCは日本の大学のなかでカレッジ制度ができる可能性のある大学のひとつであると思っている。たとえば、学部の一年生は必ずカレッジに入つて一緒に住んで、そこで勉強する。もちろん簡単な話じやないけど、この辺の農家を借りて一緒に住んでみるとかね(笑)。

また、一般的に言つてアメリカで良いとされる大学は、大学院に重きを置く大学と、学部に重きを置く大学とに分かれます。後者では一、二年生がみつり勉強して、約10人強の学生に教員一人くらいの割合で指導しているんだ。これもう以前から、SFCは大学院よりも学部に重きを置くべきだと思っているんだ。そして、SFCの利点は東京から遠いことだと信じているから、今回アメリカに行つて、学部の特に一年生を大切にし、少人数をしつかりと指導している様子を見て、同じようなことがSFCでもできたらしいなど感じました。

### —アメリカ式卒業生と大学の関係

卒業生と大学の関係にもアメリカから学べる点があると思ったね。

アメリカの大学ではOBとの絆のひとつとして、卒業生の息子・娘を優先的に入学させるところがあるんです。願書に“Did either or both of your parents go to (大学の名前)？”という項目があるんですよ。卒業生の子弟を優先的に入学させることを、日本みたいにネガティブに捉えず、伝統を守る、という意味でプラスに積極的に考えるわけ。だから親子三代が同じ学校で学ぶことも珍しくはないです。もちろん慶應の三田会もOBの組織として立派だと思います。また、アメリカの大学はホームカミングデイ(HCD)が充実していて、卒業生向けの立派なマガジンがある。まさに『KEIO SFC REVIEW』だね(笑)！

—SFC生、そして卒業生にメッセージ

「総合政策学」の定義は難しいけれど、おそらくSFCをつくった加藤さん（注1）とか石川さん（注2）は福澤諭吉先生が言われた「実學」の意識があつたと思う。当時でいう「実學」を今風に言うと「総合政策学」になるのでしよう。だとすれば世の中にはまつたく関係のない学問をするのでは総合政策学部ではない。でも、僕はいつも学生さんには逆のことを言つてゐるんだ。むしろ「一年生のときはもつと基礎的なことをやつたほうがいいと思ふ。せつかくこんなに遠いところにいるのだから大学生のときにはできぬ勉強、たとえば古典をいやというほど読む、などしつかりやればいいと思う。

さに実学だよね。  
そして卒業生の方へ。卒業して5～10年くら経つとまた勉強がしたくなるかもしれない。昔はそこで会社を辞めて学校に戻つたら人生が狂つちゃうおそれがあつたけど、今はそんなことないでしょ。僕が今回アメリカに行つてびっくりしたのは、会社を辞めて再び大学院で学んでいる日本人が多くなったこと。それだけ、日本人もリスクを取れるようになつたってことかな。30歳過ぎて、突然学者になりたくなる人もいるだろうし。そうしたらキャンパスに戻ればいいんじやない！

でもSFC生は外に出て行きたがる人が多いけどね(笑)。僕がよく学生さんに言うのは、もし本当にいい経験をしたいのなら「いい会社」よりも「つぶれそうな会社」に就職してみなさい、ということ。勉強になるぞ。本当につぶれてしまったら、またそこで考えればいい。これがまさに実学だよね。



(注1) 加藤寛。総合政策学部の初代学  
加藤寛。

石川忠雄。SFC設立当時に慶應義塾長を務めていた。



阿川 尚之  
(あがわ・なおゆき)

総合政策学部教授兼政策・メディア研究科委員  
2002年9月から2005年4月まで在アメリカ合衆国日本国大使館の公使として活躍。専門は米国憲法史、日米関係論など。  
2005年春学期は、「国際比較法制論A」、「社会と法」などの授業を担当している。

## SFC三田会会員の皆様へ

## —メールマガジンへの寄稿募集のお知らせ—

SFC三田会では、メールマガジンに寄稿していただける卒業生を広く募集しております。現在のお仕事について、また転職・独立・起業・留学のエピソード、家業を継がれた方、さらに育児体験などを自由に語っていただきたいと思います。匿名での掲載もOKです。お気軽にmaga@sfc.ne.jp宛までご連絡ください。

お問い合わせ先：  
慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス SFC三田会  
〒252-8520  
神奈川県藤沢市遠藤5322  
TEL/FAX:0466-48-0683  
[info@sfc.ne.jp](mailto:info@sfc.ne.jp)

—SFC三田会オンラインサービスご登録のご案内—  
SFC三田会では、昨年より新しいオンラインサービスを開始しています。

このオンラインサービスは、SFC三田会からのお知らせ・ご案内をお届けするための連絡先の更新が行なえるほか、継続的な連絡手段を得るための生涯有効な転送メールアドレス(3ヵ所まで転送設定可能、your\_ID@入学年.sfc.ne.jp)の付与、IDを用いたご自身の近況報告ページ(SFC-Ring)等、オンライン上での情報交換サービスのご利用が可能です。

サービスの説明、及びご登録については、三田会ウェブサイトにアクセスしてください。

<http://www.sfc.ne.jp/>



# 異國の風

## 异国风情

第12回 己を鍛える場、SFC 中国→SFC

これまで「異国の風」では、外国を訪れたSFC生の活動に焦点をしぼり、その活動内容や体験を伝えてきた。今号からは、SFC在学の留学生の目に映る日本やSFCを伝えていきたい。今回は、SFC入学以来留学生同士の交流や研究会活動などで活躍してきた、中国人留学生の肖健さん（政策・メディア研究科修士課程1年）に話を聞いた。また、肖健さんの寄稿も併せてお届けする。

留学生のネットワークを作る

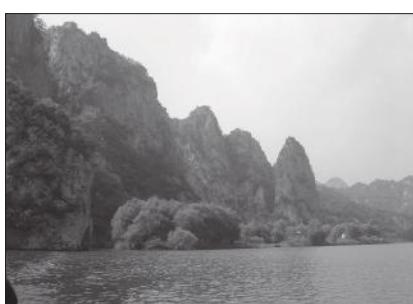
—SFCに入学するまでの道のりを教えてください。

人はまだ少なかつた。そこで、じゃあ僕はあえて日本に行こうと思ったんです。1999年4月に来日した時は、「あいうえお」さえわかりませんでした。2年間苦労して専門学校で日本語を勉強し、SFCに入学しましたが、入学当初はまったく喋れませんでした。先生たちがいろいろと優しくフォローをしてくださって、少しずつ日本語が理解できるようになりました。また、授業の履修に関して、学習指導教員がいろいろサポートしてくれて、SFCの環境にちょっとずつ慣れていきました。そして、日本にもSFCの環境にも慣れてきた2年生の頃から、スチューデント・アシスタントやCTR（注）コンサルタントなどのアルバイトを

SFCは他大学に比べ、留学生にとつて厳しい環境だと思います。留学センターがいいし、留学生用の掲示板は、あまり使われていない。つまり、「留学生だから」という考えはなくて、基本的に普通の学生と同じ扱いなんです。そういう厳しい環境のなかで留学生同士で協力して頑張ってきたので、今ではその厳しさが普通になってしまった。留学生が少ないので、甘えられない環境となる

—SFCにいる留学生にとって良い点不便だと思う点はありますか？

い、そういう気持ちがあればどんなことでもできる。こうした自信はSFCに留学しなければ、身につけることができなかつたと思います。



大連の「小桂林」といわれる場所。肖健さんの出身地の遼寧省營口市近辺にある。

が、SFCにあるさまざまな最先端の設備を知ることができ、予想外に勉強になりましたね。また、3年間お世話になつたファイナンスの森平研究会をはじめ、多くの研究会を履修しました。

学業だけでなく、SFCの留学生に向けた活動も行ないました。SFCには留学生がとても少なく、交流することも全然なかつたんです。そこで、3、4年生の頃に留学生のネットワークを作り、交流会を実現しました。学生生活担当の職員、小島学部長、重松教授のご協力をいただいて、今では30人くらいのネットワークに広がり、毎年恒例で交流会をやっています。現在は交流だけでなく、留学生同士で生活に必要な情報交換をするなど、お互いのつながりを確認する場にもなつていると思います。

でも、やはり最初は大変でしたね。教員が授業で言つてることはほとんどわかりませんでしたし、ファイナンスの研究で使う微分積分、確率、統計などは中国であまり教わつていなかつた。中国では経済学と言えばいまだにマルクス経済学が中心で、データを使って分析をする現代的な手法が取り入れられていません。だから知らなかつたことは一から自分で勉強しました。そのような授業内容に加え、日本語も十分にわからなかつたので、人の2、3倍は勉強しないといけなかつたんです。そうした猛勉強の結果、日本語もファイナンスの分析手法も確実に身につけることができたと思います。同時に、大きな自信もつきました。最初は何もできなくても、情熱と確信があ

るのですが、それがプラスだったと考えています。

――日本に留学して日中関係をどのように考えるようになりましたか？



左から2人目が肖健さん。

最近日本間にはさまざま問題が出てきますが、みなさんはどう考えますか？なぜ反日デモが起るのか、起りうるのか、日本人の多くはその理解に苦しむのではないでしょうか。他方中国でも、現代の日本をほとんど知らない人が少なきない。このことは日中間の交流不足を示していると思います。

政府やマスコミの言うことには意図や偏りがあるから、学生は一步引いて冷静に、客観的に事実を知つて自ら考えなくてはならない。なぜ中国人はそんなに怒るのか。日本政府に怒っている人もいる。それに対して、なんで怒るのか、という疑問が出ること自体おかしいんです。危機感が足りていないのではないでしょうか。過去を振り返り、正しかったことは正し

SFCは、学生が自立的、積極的に頑張ってそれを大学がサポートするというのが基本的なスタンスですよね。SFCには中国の大学はもちろん、日本の多くの大学にもない高度な設備がたくさんあるし、語学の研究室も大変充実している。つまり、意欲さえあれば、自分の役に立つものや国際人となるための要素はいくらでも見つかるはずなんです。もちろん、それは個人のスタンスの問題ですから。

—共に学ぶSFC生にメッセージをお願いします。

SFCはグローバルになりきれていない

の上に政治が成り立ち、政治の上で経済が発展する。どの国も歴史の上に成り立っているんです。そして本当の事実は歴史の中でたった一つしかない。「それぞれの視点」なんて問題じやないんです。みんなが共通してその意識を持たなくてはいけないし、根本的なところでお互い食い違つていればどんなに話し合っても曖昧合うはずがない。現在、日中どちらもその根本的なところをわかり合おうとする努力が足りないのでしょうか。

かつた、間違っていたことは間違っていたと日本人ははつきり言えるようにならなくてはいけないと、多くの中国人が主張しています。

でも、知っていても使わないのと、知らないから使わないのではまったく違う。

政策・メディア研究科修士課程1年 肖健



#### 「日本語コミュニケーション」の授業で

でも、知っていても使わないと、知らないから使わないのでまつたく違う。SFCはグローバルな人材が育つ場所だと言われています。しかし、留学生からみるとSFCはまだグローバルになっていないですね。せっかく良い環境が整っているのに、自分の興味をよりグローバルなものにしていこう、積極的に国際人になろうという意識がSFC生にはまだ足りないと感じています。以前、教員が中国からの留学生を呼んで、中国語の履修者と共に勉強する授業を設けてくれました。が、そういうチャンスは学生たちにも作れるはずです。ですからSFC生にはしっかりと将来像を抱きながら、まず自分をオープンにし、グローバルな人材としてもっと積極的に活動してほしいですね。

この企画は「異国の風」がテーマです。日本政府が留学生10万人受け入れの政策を実施したのは、留学生が増えることで、日本がもっと異国の生活を知り、異国の雰囲気を実感し、もつとグローバルな国になりたいからだと思います。

最近、中国と韓国が日本でブームになっています。一人でも多くの方に実際の中国と中国人のことを知つてもらい、理解してもらうことが大事だと思います。そのため、今後日本への恩返しの気持ちで、多くの人と触れ合って、積極的に交流していきたいです。

をとめてくれ、勉強を優しく指導してくれた先生方のおかげで、僕は大学院まで進学することができました。感謝の気持ちでいっぱいです。また、応援、サボー  
トしてくれる多くの仲間がいるからこそ、楽しい留学生活を送っています。その仲間たちを一生大切にしたい。

立精神、チャレンジ精神を育て、どんなことでも情熱と努力さえあれば絶対できることという自信を持たせてくれました。僕はこの留学経験を大事にしたいと思います。

SFCに入学したばかりのころ、将来のことや勉強のことは全然わかりませんでした。キャリア形成を考えるきっかけ

今回のインタビューを受けたのをきっかけに、僕は6年間の留学生活を振り返ってみました。日本に留学している間、いやじめられたこともありましたし、生活が辛くて泣いたこともあります。でも、



## シリーズ対談 第6回

# ものづくりの心得

TBS「世界遺産」  
チーフプロデューサー

**辻村國弘**

環境情報学部3年

**蓮村俊彰**

夢を抱く学生と、その目標とする人物との出会いの場を提供する『シリーズ対談』。6回目となる今回は、現在TBS「世界遺産」のチーフプロデューサーとして活躍している辻村國弘氏と環境情報学部3年の蓮村俊彰さんの対談をお届けする。

### 心得1 制作にお金と時間の葛藤はつきもの

実は、研究会で制作した映像がある企業が主宰したコンペに持つていき、企画が採択されたことがあつたんです。そこで、TBS「世界遺産」でも使用されているSONYのHDCAM（注）を使って短編の映画を撮ることができました。その時、僕はディレクターとプロデューサーを兼任していたのですが、「もつといいものをつくりたい。しかし、予算と時間は限られている。さて、どうするか？」と葛藤したんですね。

**辻村**：制作現場の葛藤はどこも同じだと思います。君ぐらいの経験がある人も、うちのスタッフぐらいの経験がある人も、みんなお金と時間の狭間で葛藤しているんです。TBS「世界遺産」では、文化遺産の場合、ロケは一週間、自然遺産の場合は十日ないし二週間としています。一回の取材で三箇所の世界遺産を必ず撮つてくるんです。これは予算と効率の問題で決めました。限られた予算で番組をつくっていること

蓮村：初めまして、環境情報学部三年の蓮村俊彰です。僕は初めてTBS「世界遺産」を観て以来、映像、表現に興味を持ち、勉強を始めました。現在はSFCでデジタルシネマの研究を行なっています。映画制作に限らず、制作した作品をどのようにビジネスモデルにのせて利益を回収するか、というマネジメントまで一貫して考え、活動しています。

を知らない人は、映像を観て「制作費が潤沢そうでいいですね」と言うけれど、実際は飛行機のチケットは徹底して安いのを探しますし、ホテルも星なんてついてない安い宿です。そんな苦労をしてでも、撮影にはちょっと贅沢をしたいというのがスタッフの考え方なんです。

### 心得2 決断のディレクター、いざというときのプロデューサー

蓮村：ディレクターとプロデューサーを兼任した時に、どうしても撮り直したいところがあつて、時間がないなか撮り直したんです。作品が完成した時は「撮り直してよかったです！」と思つたんですが、TBS「世界遺産」で撮り直しをすることはあるのでしょうか？

に行くときに撮つてもらうことはあるけど、撮つた本人（ディレクター）が撮り直しに行くといふことはまずない。気の毒なことです。撮りたいものをすべて撮つて、編集の時にチョイスする余裕はない。撮影を始めた時から構成を頭に入れて、これは撮る、これは撮らない、というように取捨選択していくことです。つまり、ディレクターにどうして一番大事なことは何を捨てるか、と

KEIO SFC REVIEW No.26 | 30

いう決断です。あとは、ディレクターがどういうものをつくるうとしているのか、という大枠だけをカメラスタッフに伝えて、自由に撮つてもらう。予算や撮影、日取りに関してはもちろん、その日の夕飯のメニューまで、ディレクターが判断しなければならない。それがディレクターの基本的な仕事なんです。

蓮村：ディレクターは現場での決定をすべて委ねられているんですね。プロデューサーは「ディレクターにどういった情報や指示を出すんですか？」

辻村：プロデューサーは、お金の面倒を見ます。そして、社内での番組の位置づけや、スポンサーのSONYや代理店、ユネスコとの折り合いを考えます。対外的な役目が非常に大きいです。番組制作に関して言えば、僕はああしろ、こうしろと言いません。もし、プロデューサーが上からやれと言つてしまふと、仕事上難しい局面にぶつかつた時、スタッフのなかには必ず「自分がやりたいと思ってやつたことではないから」という「逃げ」が出てくるんです。現場にいる人間に逃げ道をつくるような状況はつくりたくない。人間は任されたほうが責任感を感じるんですよ。だから、スタッフには何をどう撮りたいのか、つくりたいのか申告させます。それぞれが責任を持つて役目を果たすことは、番組づくりの最低条件ですから。

できのいい時にうんと褒めて、年に一回の忘年会の時には死ぬほどおいしく

いものを食べさせる。そして、何かあつたときは腹をくくるのがプロデューサーの仕事です。ただし、できあがつた作品に関してはいろいろと言います。仕上がった番組のビデオを初めて観る時に心がけてることは、三十年間テレビを専門にしてきた者としてはなく、最初の視聴者である、ということを意識して観ること。僕が視聴者だったらどう思うかな、ということを大切にしています。

蓮村：TBS「世界遺産」をつくつている側の人間としてではなく、それを一番初めに観る視聴者としての意見を大事にされているんですね。

辻村：そう。ディレクターは現場に行く前に勉強し、現場で撮影をし、ラッシュを観て、編集を繰り返して映像をいじるよね。そうすると、もうその作品に対する価値観を失いかけるんですよ。

蓮村：はい……僕にもそういう経験があります（苦笑）。

辻村：最終的には、ディレクターは「これは本当におもしろいのだろうか」とわからなくなってしまうんだよね。自分がおもしろいと思ってつくり始めたのに。そんな時に、僕たちプロデューサーが最初に観て意見することで、彼らに価値観を取り戻せることができ。それは最初の視聴者としての意見だからこそ意味がある。つくった本人はつまらないと思っていても、僕たち

から観ればおもしろい！と思うところは出てくるから。僕自身も経験があるけれど、ディレクターが最初の視聴者としての目を持つことは、なかなか仕上がりした番組のビデオを初めて観る時に心がけてることは、三十年間テレビを専門にしてきた者としてはなく、最初の視聴者である、ということを意識して観ること。僕が視聴者だったらどう思うかな、ということを大切にしています。

蓮村：辻村さんにディレクターの経験があつたからこそ、「ディレクターたちを見て、わかることがあるんですね。

辻村：時代は変わつても、ものづくりの本質そのものは変わらないと思うから、僕自身の経験は活きていると思います。

### 心得3 質の追求

蓮村：TBS「世界遺産」のコンセプトについてお話をお聞きしたいのです。が、デジタルアーカイブというコンセプトのもと、同じ機材を使つているとあって、他番組とは明らかに違つた映像の美しさ、音楽の美しさがありますよね。いろいろな遺跡や秘境にレポーターが行って、レポートする番組とはスタンスが違うじゃないですか。人間が出てこない、レポーターが出てこない。ナレーションと音楽が入つているだけ。こうした独自の仕様は、どんな

外国人に対してもそれは同じ。だから、インターネットショナルであり、かつ色褪せないものにするとなると、レポーターは必要なかつた。これは当時のテレビの世界では冒険だったけど、とにかく世界遺産というものをまっすぐに見据えて、「映像遺産」となるくらい質が高いものを撮り続けようという意思とは確かです。よく考えてみると、世界遺産をちゃんと観せてくれるテレビ番組は今までになかった。クイズ仕立てだつたり、専門家が出てきて解説したり、レポーターが出てきてキャラクター騒いだり。そういった演出の背景としてしか、世界遺産は映つていなかつた。それを背景としてではなく、主役として取り上げるのがTBS「世界遺産」という番組なのだ、というのが僕らの考え方。あと、世界遺産というのは基本的に不動産なんです。動かないものをどう三十分間撮り続けるかが重要なので、移動しながらの撮影へリコフターを利用したりして、撮影を工夫しています。

辻村：世界遺産という素晴らしいもの

を扱うんだつたら、番組そのものにも質が必要だと思ったんです。我々の映像も「映像遺産」として、後世に残せる

ようなものにしていきたい、と。ただ、難しい。だから、そこでちょっと手助けをしてあげることはプロデューサーの一つの仕事だね。現場を見て、困つ

ている時は助けてあげる。本人にエネルギーがあつて、やれると判断した時は任す、という観察力が必要です。

蓮村：辻村さんに「世界遺産」という素晴らしいものにしていきたい、と。ただ、

後世に引き継ぐといつても、SMAPのキムタクがレポートしたら十年後に

はなんの意味もなくなつてしまつし、外国人に対してもそれは同じ。だから、

インターネットショナルであり、かつ色褪せないものにするとなると、レポーターは必要なかつた。これは当時のテレ

ビの世界では冒険だったけど、とにかく世界遺産というものをまっすぐに見

据えて、「映像遺産」となるくらい質

が高いものを撮り続けようという意思が、スタッフのなかにあつたということが、スタッフのなかにあつたということが、スタッフのなかにあつたといつては確かです。よく考えてみると、世

界遺産をちゃんと観せてくれるテレビ番組は今までになかった。クイズ仕立てだつたり、専門家が出てきて解説したり、レポーターが出てきてキャラクター騒いだり。そういった演出の背景としてしか、世界遺産は映つていなかつた。それを背景としてではなく、主役として取り上げるのがTBS「世界

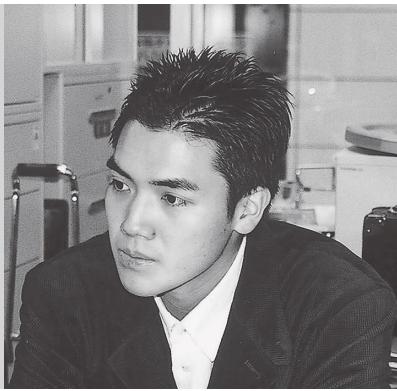
遺産」という番組なのだ、というのが僕らの考え方。あと、世界遺産という

のは基本的に不動産なんです。動かないものをどう三十分間撮り続けるかが

重要なので、移動しながらの撮影へリコフターを利用したりして、撮影を

蓮村：メーリングビデオを買って観ましたが、クレーンなどの機材をどうやつて持ち込んだのかすごく不思議で……

#### 心得4 伝えたい！ というエネルギーを大切に



辻村：彼らはそのことに関しては熟練していますから、いろんな方法を考えます。インターネットで現地のいろんな業者にあたって、クレーンひとつでもいろんなチヨイスをする。クレーンがない時は、消防のはしご車を借りたことがあります。

蓮村：音楽に関してはどういった考え方をお持ちですか？ すごく心に響く音楽を使っていますよね。

辻村：それはもう人選ですね。音響効果を専門とする業界の人の中では、一番いい人を二人選びました。最初から音楽に関しては、一流の人を選ぶというのが僕らの方針でした。カメラマンも同様です。

広告表現に関する論文が、第55回学生広告論文電通賞第三部にて優勝、文部科学大臣奨励賞を受賞。2003年、「消費者金融考察」が消費者金融サービス研究学会懸賞論文一般部門奨励賞を受賞。また同年、写真作品「時間、空間、存在」が東京都の文化政策の一環であるトーキョーワンダーウォール都庁2003に入選。

蓮村：それはやはり、音楽でTBS「世界遺産」の印象が変わってしまうからでしょうか？

辻村：そうそう。音楽が与える影響は大きいよね。だから僕らの番組を評価してくれるみなさんも、音楽が持つ力を暗黙のうちに認めているんじゃないですかね。

蓮村：「感動させる」のではなくて、まず自分が「感動する」からそれを伝えるエネルギーが生まれて、結果として人を「感動させる」ことができる。

うちのディレクターはみんな真面目だから、取材に行く前にインターネット

#### 「対談を終えて」 蓮村 俊彰

今回辻村氏と対談させて頂くことができ、感無量です。僕がTBS「世界遺産」のチーフプロデューサーである辻村氏にお会いできたことは、道端で感動させたり、興味を引くことが必要だと思います。TBS「世界遺産」は、素晴らしい音楽と映像で、どちらかというと感動させる番組ですよね。教科書的にただ世界遺産の写真やストラップが出てきて、世界遺産の歴史がどううとうと語られる、という番組とは違います。人を感動させるためにはどういったことが必要だとお考えですか？

辻村：何もせずに感動させることは無理だよね。僕はいつもみんなに、ジャーナリズムというのは、5W1Hなどと話しています。たとえば、君たちが大学に行く途中で大きな交通事故を目撃したとする。そして大学に行って、自分の仲のいい友達にまず何をどのように言いますか？ それはおのずと5W1Hになる。「ねえねえ、聞いて！ 今朝渋谷の○○通りで、こういう大きな事故があつて、どうのこうの……」ついでに、自分が驚いたり、感動したり、怒ったり、泣いたり、笑ったりするそのエネルギーを自分のなかにどどめておけず、誰かに伝えていく。つまり、「感動させる」のではなくて、まず自分が「感動する」からそれを伝えるエネルギーが生まれて、結果として人を「感動させる」ことができる。

今回僕のような一介の学生を快く受け入れ、得るもの多きお話を頂けた辻村氏、並びにこの様なまたとない機会を与えてくださり、色々お世話を頂きましたKEIO SFC REVIEW編集委員会のみなさんに深く感謝致します。

トで調べたり、専門の先生から話を聞いたり、本を読んだり一生懸命勉強するんです。それはそれでいいんだけど、あんまり勉強しそうなよって助言します。頭でっかちになつて、目が曇つて、頭の中にある勉強したことをトレースするようなつくり方はやめてくれれど。現場に行つたら、勉強したことはいつたん忘れて、世界遺産と直に向合つた時に君が何を感じたのか、どういう感動を受けたのか、とにかくそれをそのまま番組にしてちょうどいいよつて。その時に、補助として勉強したことが役に立つと思うんです。ディレクターが一人の人間として受け止めたものを、映像にして人に伝えたい、という切実な気持ちやエネルギーがあるからこそ、番組が成り立つているんだと思う。

えのかもしませんね。  
蓮村は大学に入つて、映像に加工するためのソフトやフォーマットなどの技術の勉強をしていました。しかし、勉強していくうちに、一番大切である、伝えたい内容や、伝えたいといふ気持ちよりも、手段であるはずの技術ばかりに目を向けていたように思います。

今日は、憧れの辻村さんにエネルギーが大事だと言つていただき、励まされた思いです。

三十年前の自分を見るようでした。  
夢を持った蓮村君との対談、いい経験でした。

彼を含めて、若い人は今は気づかないと思いますが、若いということの一番大切なことは「生意気」であることです。

分別や常識はいすれ、嫌でも身につきます。でも、何にでも突つかる「生意気」なエネルギーをもし失つたら、歳をとつた証拠です。

「生意気」というのは、実は「社会主義」という言葉に繋がっていると思うのです。「これは許せない」という社会の不正義に怒りと若さの力をぶつける……。ジャーナリズムに最も大切なのは、そのパワーとエネルギーだと思いません。

それができる今、君たちのとてつもない力を思いつきり發揮してください。

辻村：生意気はみんなそれぞれ持つてゐると思います。たとえば、学校や、地元の友達のなかに人気のある人っていますよね。どこからともなく、その人の周りに人が集まっちゃうような。そういう人を見ていると、学歴があるわけでもないし、とりわけ話がおもしろいわけでもないけど、一つ一つのものを見る目が非常にユニークだつたり、新鮮だつたりする。それを伝えることにある種のエネルギーを感じるから人が集まつてくるんだと思うんですよ。つけ加えて言うと、人に伝えたいというエネルギーの他に、物事を非常に多角的に見られる感受性が身に付いてくると、いいパイプ的な役割ができると思います。それはディレクターやプロデューサーを務める上でも役に立つことです。がんばつてください。

1934年、東京生まれ。東京大学経済学部を卒業後、NHKに入局。アナウンサーを経て、番組制作に関わる。昭和49年株式会社東京放送(TBS)に入社。ラジオニュースで記者修行を始め、「報道特集」などのニュース特集の制作に携わる。その後、「筑紫哲也のNews23」のナースク、プロデューサーを務めた。

現在は、日曜23時30分から放送されているTBS「世界遺産」のチーフプロデューサーとして活躍中。

辻村：見てよ、見てよ…こんな素晴らしい世界遺産がここにあるんだよ！ という気持ちですね。

辻村：そうそう。まさにそれがエネルギーなんですよ。伝えようとするエネルギーが相手を感動させる。それがジヤーナリズムの基本だと僕は思つています。エネルギーのない伝達は貧弱であるとしか思えない。逆に言えば、内容が貧弱であつても、出す人間のエネルギーでその情報は力を發揮しうるかもしれません。

蓮村：たとえば「今日の朝ごはんがおいしかつたー！」というどうでもいいような話でさえも、エネルギーになり



## 辻村 國弘(つじむら・くにひろ)

1934年、東京生まれ。東京大学

経済学部を卒業後、NHKに入局。ア

ナウンサーを経て、番組制作に関わる。

昭和49年株式会社東京放送(TBS)に

入社。ラジオニュースで記者修行を

始め、「報道特集」などのニュース特

集の制作に携わる。その後、「筑紫哲

也のNews23」のナースク、プロデュ

ーサーを務めた。

現在は、日曜23時30分から放送され

ているTBS「世界遺産」のチーフプロ

デューサーとして活躍中。

(注) HDCAM

ハイビジョン映像の記録再生が可能な放送・業務用デジタルビデオシステム。

「対談を終えて」 辻村 國弘

えのかもしませんね。

蓮村は大学に入つて、映像に加工するためのソフトやフォーマットなどの技術の勉強をしていました。しかし、勉強していくうちに、一番大切である、伝えたい内容や、伝えたいといふ気持ちよりも、手段であるはずの技術ばかりに目を向けていたように思います。

今日は、憧れの辻村さんにエネルギーが大事だと言つていただき、励まされた思いです。

分别や常識はいすれ、嫌でも身につきます。でも、何にでも突つかる「生意気」なエネルギーをもし失つたら、歳をとつた証拠です。

「生意気」というのは、実は「社会主義」という言葉に繋がっていると思うのです。「これは許せない」という社会の不正義に怒りと若さの力をぶつける……。ジャーナリズムに最も大切なのは、そのパワーとエネルギーだと思いません。

それができる今、君たちのとてつもない力を思いつきり發揮してください。

辻村 國弘(つじむら・くにひろ)

1934年、東京生まれ。東京大学

経済学部を卒業後、NHKに入局。ア

ナウンサーを経て、番組制作に関わる。

昭和49年株式会社東京放送(TBS)に

入社。ラジオニュースで記者修行を

始め、「報道特集」などのニュース特

集の制作に携わる。その後、「筑紫哲

也のNews23」のナースク、プロデュ

ーサーを務めた。

現在は、日曜23時30分から放送され

ているTBS「世界遺産」のチーフプロ

デューサーとして活躍中。

辻村：そうそう。まさにそれがエネル

ギーなんですよ。伝えようとするエネ

ルギーが相手を感動させる。それがジ

ヤーナリズムの基本だと僕は思つてい

ます。エネルギーのない伝達は貧弱で

あるとしか思えない。逆に言えば、内

容が貧弱であつても、出す人間のエネ

ルギーでその情報は力を發揮しうるか

もしれない。

蓮村：たとえば「今日の朝ごはんがおいしかつたー！」というどうでもいいような話でさえも、エネルギーになり

# 私の推薦図書

## 『サル学の現在』

この本が私にとつてなぜ衝撃的だったかといえば、立花隆というジャーナリストと「サル学」という言葉がどう

しても結びつかなかつたからだ。立花隆という人を知つたのは、一

連のロッキード事件の報道番組などに頻繁に登場していた1980年代中ころで、その些細な事一つ見逃さない膨大な知識と記憶力、あくなき事実の追求、「解明」といふ人間の究極的好奇心の披瀝、そして何よりも実際に楽しそうに「解明」を語る姿が印象的で、これこそまさしくジャーナリストなのだと思つたものである。

そういうわけで当時私は、優れたジャーナリストとは政治を裏側まで見通し、時事問題に自らの見識をもつて臨み報道する人々というイメージを持っていたから、その代表たる立花隆がなぜ「サル学」なのかということに何の想像力も働かなかつた。しかも「サル学」なるものにひとかけらの知識もなく、

この人が今「サル学」だというのであれば、見過ごしにはできないと思つて、この本を開いたのである。

これが滅法おもしろかつた。そして立花隆という人が「人間探求」のジャーナリストであることを知つた。学問としての「サル学」は

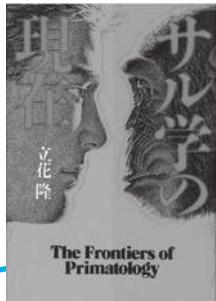
1900年代半ばにニホンザルの研究から始まり、劇的な発見と理論の修正を繰り返しながら現在に至つているという。人間とは何かを、ヒトに最も近い種であるサルをることによつて「解明」しようとしている学問である。気の遠くなるような長期観察と偶然の発見、モデルや理論の修正、そしてまた新たな発見、修正。それを繰り返すうちに、人間がいかに人間自身とその社会というフィルターから逃れ難い存在であるかを知るのである。



重松 淳 (しげまつ・じゅん)

総合政策学部教授兼政策・メディア研究科委員  
専攻は、音声学、中国語・日本語教授法。イン  
テンシブ中国語やコンテンツ、日本語の他、ブ  
ロジェクト「ITと学習環境」「第二言語習得論」な  
どを担当。

たとえば、1956年にニホンザルの研究が初めて発表された。一大センセーションを巻き起こしたこの発表で、サルの群れはある



## 『サル学の現在』

立花 隆 (たちばな・たかし)

平凡社 1991年8月初版

で人間社会のように、オスのボスに率いられた権力支配構造を持つ社会だと私たちは思い込んだ。しかしその後の研究によつて、実際は二木ンザルの野生の群れにボスなる存在はなく、個人が(個サルが)実際に自由に生きている社会であつて、順位を上げることに血道をあげる競争社会ではないということがわかつた。群れ同士はなるべく接触を避け、逆に接触した場合はばらばらに混ざり合つて静かに餌を食べているという。

ゴリラの研究と保護運動の末、ゴリラの研究と保護運動の末、悲劇的な死に方をしたダイアン・フォッシー博士の話は有名だが、その観察対象だったゴリラの群れに接触した日本の研究者は、優位のシルバーバック同士のけんかを、劣位のものが仲裁するのを見た。自分の利害を離れて、つまり自分の身の危険を顧みず、平和のために懸命にけんかを止めさせようとするという。鼻歌を歌い、声でお互いコミュニケーションをとり、

なるべく穢やかに暮らそうとするゴリラたち。

このような「サル学」の意外な発見を通して、立花隆という人間は人間社会というフィルターをはずし、冷徹な目をもつて人間自身を「解明」しようとする。その徹底したインタビューは、サル学者自身の生き方、思想、哲学にまで及び、立花自身が満足するまで、追求の手を緩めない。そして『脳死』『サル学の現在』に続く宇宙、地球、生命、臨死といったテーマが、立花隆の知的好奇心の必然的なラインナップとして追求されていくのである。

私はこの本を開いたことによつて、人間の知的好奇心の向かう一つの方向を知り、その「解明」への情熱の如何ともしがたい強さを知り、実に不可思議の感に打たれたのである。

# SFCのこれからを考える

第4回 若手教員に聞く 大前学（政策・メディア研究科助教授兼環境情報学部助教授）

## 「かけがえのない時間を」

これまで幾度となく語られてきた「SFCらしさ」や「これからSFC像」——それらを分析し、SFCのこれからを語るために新鮮な視点を提示する。

第4回目は大前学政策・メディア研究科助教授の寄稿をお届けする。



「SFCを何かに例えるなら、高級スーパー銭湯かなあ」と思っています。そこで、SFCをイメージしながら、高級スーパー銭湯「スーパー遠藤」（勝手に名前をつけました）の話を作ってみました。この話をもとに、SFCの現状とこれからについての私の考えを述べたいと思います。

### 「スーパー遠藤」の5人

A君、B君、C君、D君、E君の5人が、高級スーパー銭湯「スーパー遠藤」に行くことになりました。帰りのバスは4時間後。4時間あれば十分満喫できそうです。

5人は受付に並び、入場料を支払います。入場料は三千円、ちょっと高めです。並んでいる時に、他の客の会話を聞こえてきます。「最近、グローバル化だか、為替変動リスク対策だか何だか知らないけど、○×

ランドでは、入場料として千円、十ユーロ、十ドルをそれぞれ払うらしいよ。超面倒くさいね」とP君、「△△の湯の料金なんて、千円に、十ドルに、千ガバスに、一万ペリ力だそうよ」とQ子、「ガバス、ペリカつて何?」とP君、「それはさておき、ここはちよつと高めだけど、日本円だけでOKなのが楽よねー」とQ子……たわいもない会話を耳にしつつ、A君は「入場料なんて関係ねえ、俺は『スーパー遠藤』の『秘伝の薬湯』に入りたいんだ」と心の中でつぶやきました。

A君たちは、入場料を支払い、わくわくしながら入場します。入り口付近には、レストラン、ゲームコーナー、カラオケなどがあり、お風呂以外の施設の充実ぶりに驚きます。A君は、「さあ、『秘伝の薬湯』に入るぞー!」とお風呂場へ、他の4人は、「時間がたっぷりあるし、カラオケをやつてみます。A君は、「いいことを思いつきました。『せつかく、錢湯に来たんだから、お風呂に入らなければなりませんので、あまりゆっくりつかることができません。

残りの4人は、カラオケコーナーに陣取りました。今まで見たこともないハイテクな新型マシンに驚きます。すっかり、カラオケにはまってしまいました。しばらくして、曲を予約し、順番を待っているB君は、「いいことを思いつきました。『せつかく、お風呂に入らなければなりませんので、あまりゆっくりつかることができません。

そんなこんなで、お風呂とカラオケを行ったり来たりしているうちに、お酒を飲みすぎたE君には不幸が起ります。お酒のぼせでフラフラになり、ついつい開けた

A君同様、4人ともお風呂の多さにびっくりです。ヒノキ風呂、ジャグジー風呂、ラベンダー風呂、ワイン風呂、コーヒーフル、天然温泉、露天風呂、滝風呂、電気風呂……、なんでもありますし、選び放題です。大人気のお風呂では子供たちが、ぬるいお風呂では子供たちが、40人くらいに入る浴槽で芋洗い状態になっています。しかも入る前に抽選……なんじゃそりや。また、風呂底がヌルヌルしていたり、洗い場のシャンプーが水っぽかつたりと、ムムムと思ってしまう点もあります。良かろうと悪かろうとどんなお風呂であれ、自分の曲が始まる前に戻らねばなりませんので、あまりゆっくりつかることができません。

そんなこんなで、お風呂とカラオケを行ったり来たりしているうちに、お酒を飲みすぎたE君には不幸が起ります。お酒のぼせでフラフラになり、ついつい開けた

KEIO SFC REVIEW No.26 | 36

扉が従業員専用口、しかもオートロック。気づいた時には、戻れなくなっていました。従業員も気づいてくれません。一緒だったB君、C君、D君も程よくお酒が入つていつことにしました。

「秘伝の薬湯」につかっているA君、最初の熱さにしばらく耐えていると、だんだんお湯の熱さが快感に変わってきました。そして全身の疲労が薬湯の効果で消えていくことに気づきました。なんとも言えない心地の良さを楽しむA君は、近くにいる従業員に話かけてみることにしました。従業員は親切かつ物知りで、会話が大いに盛り上がりります。従業員は、「秘伝の薬湯」を飲むと体に良いということを教えてくれました。そこで、言われた通りに飲んでみると、あら不思議、胃もたれが消え、頭がどんどん冴えてくるではありませんか。A君は従業員と話して、とても得した気分になりました。

さて、そろそろ帰る時間になりました。フロント付近に集合の約束だった5人は、フロント付近に集まつてきました。フロン

トには、「お客様アンケート記入コーナー」があります。すっかり、「スーパー遠藤」が気に入ったA君は、アンケートに良い点、

お客様アンケート→大学を良くしたいとい  
う学生の声  
マッサージ↓大学院

→高級スーパー銭湯からリビーター溢れる  
高級温泉旅館へ

トには、「お客様アンケート記入コーナー」があります。すっかり、「スーパー遠藤」が気に入ったA君は、アンケートに良い点、

お客様アンケート記入します。お風呂のリニアールも計画されているみたいですので、要望を書けば採用されるかもしれません。

他の4人は、アンケートなんでお構いなしで、バスが来るまで、たわいもない会話で盛り上がります。アンケートを書き終えたA君が言いました。「悪いんだけど、みんな先に帰つていいよ。従業員の人にマッサージ(別料金)を勧められてさあ、2時間コースをやつてみたいんだ」。

### 高い意識を持つて

「スーパー遠藤」は、お客様が自由に楽しめることです。そして、8割のお客が「スーパー遠藤」の本当の良さを知ることなく、別の楽しみに多くの時間を使って帰つてしまっています。

たいていの人は、楽しみ方の違いこそあれ、それなりに楽しんでいるようですが、「スーパー遠藤」は当面つぶれることはないでしょう。しかし、このまま変化なく営業を続ければ、工夫を凝らした他店との競争で入場料を下げざるを得なくなり、高級スーパー銭湯から普通の銭湯になつてしまふかもしれません。

従業員からすると、当店の名物「秘伝の薬湯」を堪能していただかなきやもつたいない。お客様には、ぜひとも高い意識を持つて「スーパー遠藤」に来店してほしいところです。

しかし、本当に大切なことはお客様の意識ではなく、従業員の努力だと思つています。お客様アンケートの苦情が少ないこと安心し、努力を怠つていませんか？ アンケートの内容ではなく回収率を危惧しなければならないのです。お客様ガイドの充実や一時的なキャンペーンで乗り切ろうとしていませんか？ 本当に必要なことは、従業員一人一人がすべてのお客様に目を配り、温かく包む努力をすることではないでしょうか？ スーパー銭湯の良さを残しつつ、リピーターが溢れる高級温泉旅館にしていくこと、そして、すべてのお客様にかけがえのない特別な時間を提供すること、それが今後の「スーパー遠藤」に求められていることではないでしょうか？

価値相対化、ドライな雰囲気、こんな時代の今だからこそ、友情、愛情、誇り、帰属意識、当事者意識が大きく育まれる、特別なギャンパスにしていきたい。それが私のSFCに対する思いです。

お客様→学生  
入場料→受験  
カラオケ→サークル、バイト等学業以外の活動

従業員→教員  
お風呂→授業



大前 学  
(おおまえ・まなぶ)

1972年生まれ。1995年東京大学工学部卒業。2000年に東京大学大学院工学系研究科博士課程を修了。SFCには、2000年に環境情報学部に着任し、2005年より現職。研究分野は機械力学・制御、自動車工学。授業では、「情報技術基礎」、「情報技術ワークシヨップ」、研究プロジェクト、大学院プロジェクト等を担当。

## 特集幹事

稻 薩 正 彦 (環境情報学部教授)

## 編集長

吉 田 賢 一 (総合政策学部3年)

## 副編集長

小 杉 崇 文 (環境情報学部2年)

## 編集

### 特集

桂山奈緒子 (総合政策学部3年)

中澤仁美 (環境情報学部3年)

青木想 (総合政策学部3年)

北澤嘉英 (総合政策学部3年)

平野雄大 (総合政策学部3年)

藤山奈月 (総合政策学部3年)

根本和義 (総合政策学部2年)

小野島茉莉 (総合政策学部2年)

石関実子 (環境情報学部2年)

### SFC front runner

朝倉麻衣 (総合政策学部3年)

### When I was young

田村佳菜 (環境情報学部3年)

### Co-net

百谷伶奈 (総合政策学部3年)

藤崎聖子 (総合政策学部1年)

### キャンパスへ帰ろう

出口香央里 (総合政策学部3年)

### 異国の風

神谷健 (総合政策学部2年)

### シリーズ対談

稻田桃子 (総合政策学部3年)

百谷伶奈 (総合政策学部3年)

### 私の推薦図書

小杉崇文 (環境情報学部2年)

### SFCのこれからを考える

神谷健 (総合政策学部2年)

### レイアウト

野口諒子 (総合政策学部2年)

### 付録 模型

HAL-CURATION

(稲葉佳之+坂口祐)

### 湘南藤沢学会

#### KEIO SFC REVIEW担当

堀茂樹 (総合政策学部教授)

### 事務局

田坂真美

## 編集後記

本誌の配布に関して、α館(本館)事務室に用事があった。窓口で対応してくれた職員の方曰く、「『KEIO SFC REVIEW』なんていふ雑誌があるんですね」。一瞬私は戸惑った。SFCの職員であるにもかかわらず、SFCの学会オフィシャル広報誌の存在を知らないという事実に……。

SFCは、学生と教員、職員の三者が一体となって理想の大学を創ることを理念として掲げている。SFCのメンバーであるということは、その理念を実現しようとする情熱と、それにふさわしい行動が求められるということである。広報誌は、理想の大学づくりの一翼を担うものであろう。それなのに、広報誌としての『KEIO SFC REVIEW』を知らない職員がいることはたしかだ。また、教員のなかには、本誌の取材に応じることに消極的な人がいる。

このことは、いったい何を示しているのだろうか? 私は、広報誌の編集に携わるSFC生として、SFC関係者のなかにはSFCを世界一のキャンパスにしていくとする情熱の足りない人がいるのでは? と感じている。斎藤信男環境情報学部教授は本誌21号で、「設立当初に比べて、平均年齢が高くなり、お互いのやる気が刺激し合うような雰囲気が、多少緩和されてしまった」と、SFCで働く教職員について述べている。

そういう状況だからこそ、本誌は重要な役割を担っていると思う。たしかに本誌は広報誌だから、SFCの研究や教育を広く世の中に広めることを第一のミッションとして掲げている。しかし、SFC「内部」つまり学生・教員・職員の意識が低い限り、いくら広報に力を入れても、SFCを世界一のキャンパスに醸成することは不可能であろう。まずは学生・教員・職員が高い意識をもってキャンパスを創っていかなければならぬ。そのためにも、本誌は広報誌としての性格だけでなく、SFC内部に「刺激」を与えるような雑誌であることが求められるだろう。

SFCは、もっと上をめざせる。『KEIO SFC REVIEW』も、もっと上をめざせる。しかし学生編集委員の知恵だけでは、上をめざすことにも限界があるかもしれない。本誌の内容やめざすべき方向について、読者諸氏からの忌憚のないご意見をお待ちしている。

最後に、力量不足の編集長を常にサポートしてくれた学生編集委員のみなさん、私たちの書く稚拙な日本語を丁寧に校正してくださる堀茂樹教授、いつも無理なお願いを快く引き受けてくださる印刷所の株式会社ワキプリントピア様、そして、私たち学生編集委員のことを常に思いやり、最後の最後まで細かい点に気を配りながら原稿をチェックしてくださる事務局の田坂真美さん、こうしたみなさんの支援なしに本誌26号を完成させることはできなかった。この場を借りて、幾十にも幾十にも感謝したい。

26号編集長 吉田賢一

2005年7月15日 発行

発行人 熊坂 賢次

発行所 慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県 藤沢市遠藤5322

Tel 0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

[gakkai@sfc.keio.ac.jp](mailto:gakkai@sfc.keio.ac.jp)

バックナンバー・年間購読をご希望の方は

ご連絡ください。

制作・印刷 株式会社ワキプリントピア

〒252-0815 神奈川県 藤沢市石川6-26-19

Tel 0466-87-5811

Fax 0466-88-6560

<http://www.printpia.co.jp/>

TEL ☎ 0466-49-3437

FAX □ 0466-49-3594

MAIL ⌂ [gakkai@sfc.keio.ac.jp](mailto:gakkai@sfc.keio.ac.jp)

年間購読料は手数料を含め、合計1,800円です。

年間を通じて購読されますと200円の割引となります。

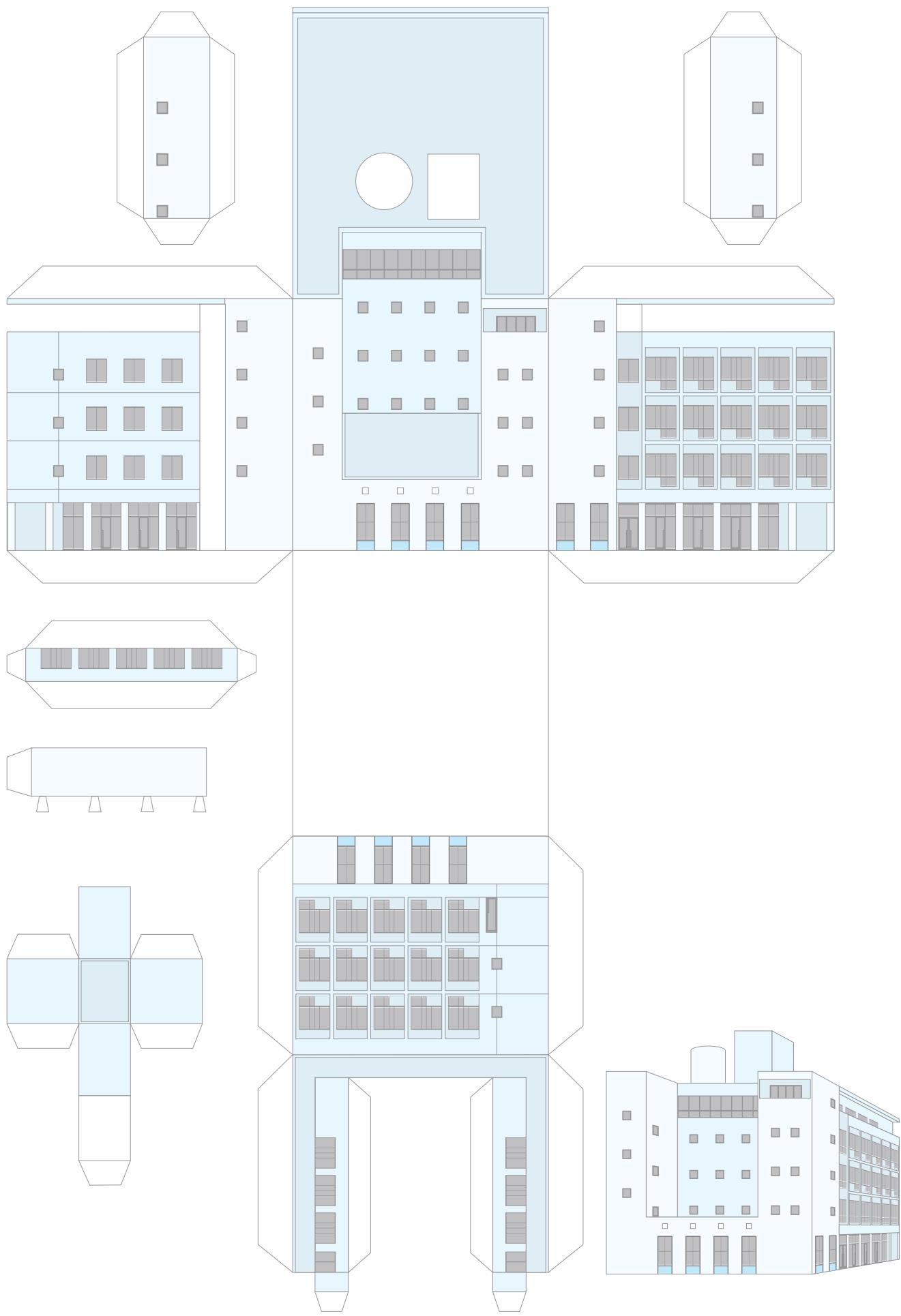
発行回数は年4回を予定しています。

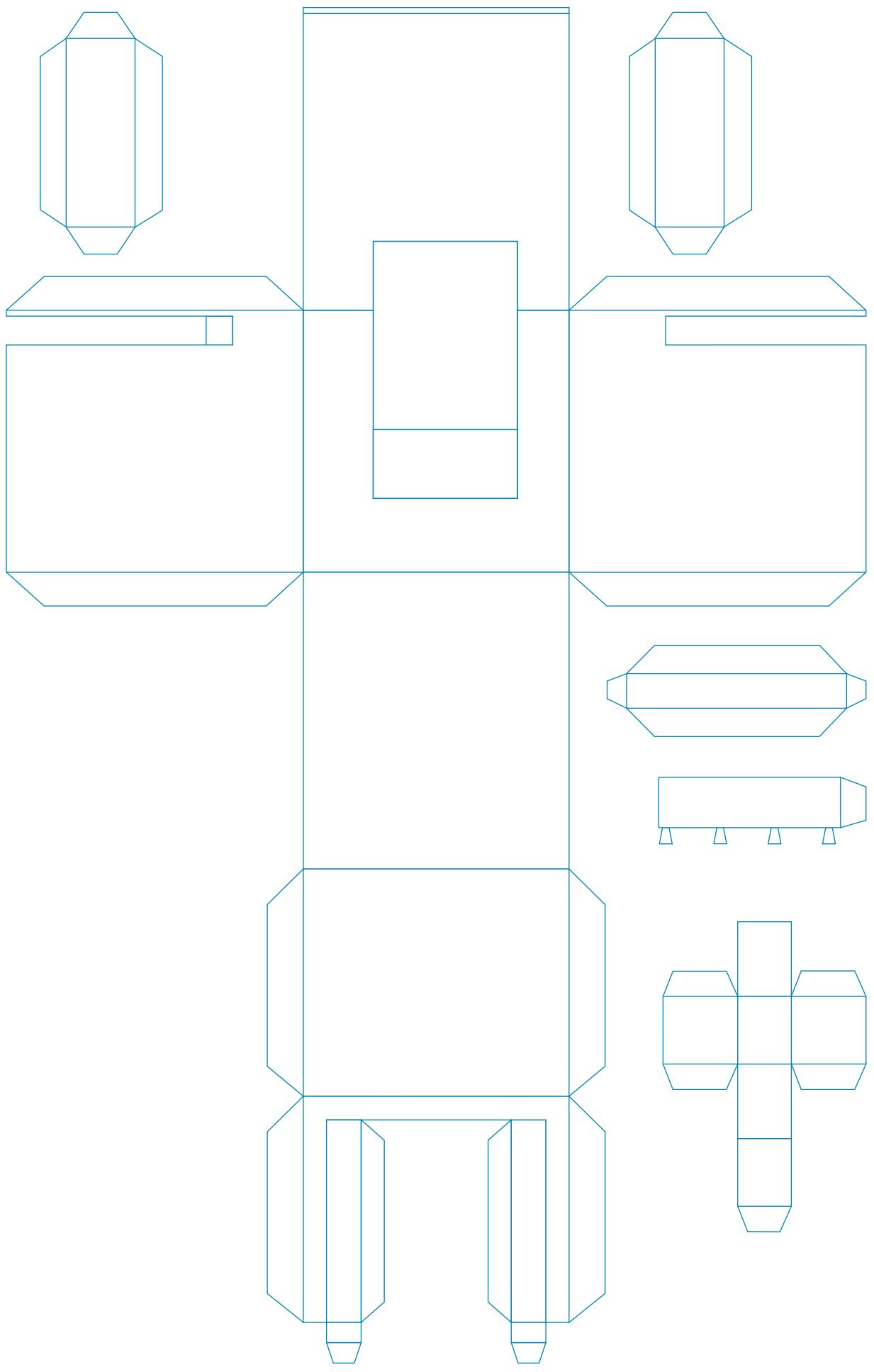
■ 無断転載・複製を禁じます。

ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。

**make your campus**

16°(オミクロン)館 研究棟







**KEIO SFC REVIEW No.26**

**湘南藤沢学会 2005.07.15**

**ISSN 1343-3318 定価 300円(消費税込)**